

### 資料一3 天竜川上流域の災害年表

※「社会の動き」への記入方法：災害・伝承の発生した年の近年におこった社会の動きに関しては、**斜字**で記入

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き
714.7.15	和銅七年五月二十五日	遠江地震	和銅八年五月二十五日、遠江地震で山が崩れ、徳玉川を塞ぐ。水そのため流れず。数十日を経て欠潰し、敦智、長下、石田の三郡、民家170余区を没し、あわせて苗を損ず(続日本紀)	714遠江 地震-715	旧南信濃村西島地区～木沢地区にかけての遠山川約1キロ間で確認できる埋没林の年代測定結果より、水没したのは714年と判明、過去の記録とさまざまな自然科学データによって、遠江地震により池口川左岸で池原くすりれが発生し、池口川をせき止め一つ目の天然ダムをつくり、さらに下流へ下った岩石が右岸側の尾根を乗り越えて遠山川に流れ込み、川をせきとめて二つ目の天然ダムができ、その天然ダムに沈んでいた森がしだいに土砂に埋まり、埋没林になったと考えられている				和銅七年一月／初めて食封の田租を封主に全給する 和銅七年九月／撰録を禁止
715	靈龜元年五月二日		靈龜元年五月二日敦知、石田、長下の三郡民間百七十余、鹿王河(天竜川の旧名)洪水(天竜川洪水史)						靈龜元年五月／百姓の流亡を戒め、浮浪者は浮浪地で課す(土断法)
726	神龜三年		神龜三年十二月丁卯遠江五郎水害を被る(天竜川洪水史)						神龜三年九月／豊作により今年の田租を免じ
761	天平宝字五年七月		天平宝字五年七月辛丑荒王河決潰三百余丈(天竜川洪水史)						天平宝字五年十一月／東海・南海・西海の3道の節度使を任命して、船舶・兵士を動員し、訓練
1225.7.15	元仁二年六月二日					○大蛇が天竜川を流れていった話 「元仁二年六月二日、雨がひどく天竜川の水は濁流がうずまき、得たいのしれないものが沢山流れ、二丈(5.6メートル)もある大蛇も流れていったという。」	1225 洪水- D586	○鎌倉時代の洪水 記 ○濁流とともに流れ る大蛇	元仁二年十二月／幕府、評定衆を設置、鎌倉大番の制度を定める



西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地底 No.	エピソード・意義	社会の動き
1540.1.22-23	天文八年十二月十四日～十五日		大雨が降り、大水となった橋が流され西東の通路も止まってしまった(諏訪市)	1540洪水 -784					
1540.9.11	天文九年八月十一日		近年にない大風で諏訪上社前宮で古木や大木が吹き折れる、風が襲まってから大水が来て大町では家が十ばかりも流れた(諏訪市)	1540洪水 -785					天文九年五月/武田信虎、信濃国佐久郡を攻略
1542.8.14	天文十一年七月四日					○桑原城の攻防 「西の刻に大水ふり、翌日諏訪頼重、武田信玄に振る。(守矢頼真書留)前日に発生した大水が、諏訪方総大将諏訪頼重の桑原城攻防の命運をわけたという。戦線から先ず譜代の家臣が難脱するようない結果であったことが暗示されている。」	1542洪水-D500	○歴史に影響を与えた天災の史実	天文十一年九月/武田晴信(信玄)の諏訪進出し諏訪頼重が滅亡 武田軍は天竜川沿いに攻め下り、榑与城(箕輪町)の藤沢頼親を攻め、降伏させた
1544	天文十三年					○四百年前の南原橋 「四百年前、現在の飯田市下久堅南原にある黒瀬が淵の上には天竜川唯一の橋がかかっていた。(南原橋)天文十三年(1544)におこった洪水で、その橋が落ちてしまった。その後ずっと橋はなく、明治二年になって赤須の山から持ってきた松の大木を使って橋がつくられた。」	1544洪水-D587	○天文十三年の洪水、南原橋流出の史実	
1544.7.28	天文十三年七月九日					○横山七か寺、御堂島薬師の流失 「天文十三年七月九日(1544年7月28日)の大洪水で横山七か寺(青木川を地蔵峠に向かう途中)、御堂島薬師(下青木地区)が流出した。(大鹿村誌)この大洪水は、全国的におこったようで、京都でも大洪水で四條五條橋などが流失している。」	1544洪水-D588	○天文十三年の洪水、横山七か寺・御堂島薬師流出の史実	天文十三年七月/足利義晴、細川晴元と和睦
1558～1570	永禄年間					○永禄年間における川除普請、宇田屋付近の竹木の伐採禁止(喬木村伊久間)	D508	○防災対策	永禄三年五月/桶狭間の戦いで織田信長が今川義元を討つ

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き
1569.7	永禄十二年六月		小川川氾濫(永禄十二年六月小川郷の水損川除普請の資料)	1569洪水 -732					永禄十二年三月／織田信長、撰銭令をだす
	中世末期					○伊久間水除土手(掘割) 「長さ1,700m、高さ1m余りの掘割で、伊久間の人たちが集団で中世末期頃からつくりはじめたという。人家の多いあたりには水除土手は二重に造られている。しかし災害が遠のくとその効得を忘れがちになり、掘割を埋めたり物を置いたり、いざいざを怠った。その結果、大きな害が降った昭和2年6月には、妻がらなどが掘割の中に入っていたのでたちまちに水が溢れ出し、伊久間は災害に見舞われた。」	D508	○災害に対する人の和慮	
1573	天正元年		天正元年癸酉八月洪水大風吹く(川路資料)	1573洪水 -730					天正元年四月／京都へ上洛しようとして三河国主で攻め上った武田信玄が死亡
1573-1593	天正年間					○蛇塚 「むかし西箕輪の大童の耕地に住んで作物を荒らし、人々を恐がらせていた大蛇が、大泉あたりにもまじりて来たため、時の領主保科正家が家臣に命じて退治させ死骸を埋めたという。昭和の初期の頃までは高く石が積まれ、蛇がたくさんいたといわれるが、西天童耕地整理のために取り除かれ、水田となってしまったが、蛇塚という地名が残されている。」	天正-D535	○耕地を荒らす大蛇退治	天正三年五月／武田勝頼が長篠の戦いで織田信長に惨敗、下伊那地域への入口にあたる重要な岩村城を占領していた秋山信友が織田軍の攻撃により降伏
1578.6.17	天正六年五月十二日		天正六年戊寅五月十二日大洪水(川路資料)	1573洪水 -730					
1580	天正八年		天正八年庚辰霽星現る(川路資料)	1573洪水 -730					

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地歴 No.	エピソード・意義	社会の動き
1582.3	天正十年二月					○大蛇が城 「大蛇が城(大島城)の崖下にある天竜川の深い淵には大蛇が棲むという。雪ひとつない晴れた日の朝、淵の上より立ち昇る水気が霧の雨となって城に降りそそぐのを鼠る人たちは、大蛇の仕業だといって不吉の前兆でもあるように恐れていた。天正十年二月、織田信忠の大軍が火矢で城を攻めた時、火の手があがると不思議にも淵の水が雨となって消えてしまった。これは大蛇の仕業だと淵に無数の矢を射込むと、淵の面に大波が狂い起き、天地晦冥の大雷雨が起こり、天竜川の水を真っ赤に染めて大蛇が淵の底深くに沈んでいった。そして城は壊れ、落城した。今でも城跡の柵を掘りおこすと真っ黒い燐米が出てくるという。また一説に城兵が、城に向かって大蛇が吐く水煙を不吉に思い、射殺した。守護を失った城は間もなく敵に攻め落とされたともいう。」	1582- D520	○淵の主＝大蛇 ○大蛇の怒り	天正十三年／織田信忠の大軍が大島城(大蛇が城)を攻め落とす
1585.6	天正十三年六月		天正十三年乙酉六月洪水(川路資料)	1573洪水 -730					
1586.1.18	天正十三年十一月二十九日	天正地震	桑畑沢源流部(清内路村)の斜面崩壊堆積物中の埋れ木は年代測定から、天正地震と一致している、天然ダム形成	1585天正 地震-718		○御射山社の破壊 「南箕輪村の春日街・道沿いの西側に、大きな落葉松が2本寄り添うように生えている下に「御射山社」と刻まれた石碑が建てられている。この場所には、大同四年(809)に坂上田村丸が天皇の勅命により建立した御射山社本社があった。451年後に再建されたが、天正地震(1586年1月18日)の時に破壊され、その後243年間造営することができずにいた。そこで文政十年(1827)七月に由来を記した碑が建てられた。」	1586 地震- D534	○天正地震による御射山社の破壊の史実	天正十三年七月／秀吉が関白となり藤原姓を受ける
1594.9.24	文禄三年八月十日		文禄三年壬辰八月十日洪水(川路資料)	1573洪水 -730					文禄三年三月／秀吉、伏見築城を開始

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き
1596.7.14-18	慶長元年六月十九日・二十三日		六月十九日・二十三日、信濃等に大洪水、百年以来の大水という						慶長五年九月／関が原の戦い
1596.7	慶長元年七月	地震	慶長元年丙申七月地震(川路資料)	1586地震 -734					慶長八年二月／徳川家康が征夷大将軍となり、江戸幕府を開く
1608	慶長十三年		慶長十三年夏大出水(川路資料)	1573洪水 -730					慶長十七年三月／幕府、キリシタンを禁じ京都の教会堂の破却を命ずる(禁教令)
1612.5	慶長十七年五月		五月天竜川大洪水。田中城三日町流失、竜東へ移る。(現箕輪町)	1612洪水 -785					慶長十九年十月／徳川家康、大坂征討の命令を発する(大坂冬の陣)
1614.9	慶長十九年八月		慶長十九年申寅八月大洪水(川路資料)	1573洪水 -730					
1615頃	元和元年頃					○石神の松 「元和(1615～)の頃、天竜川の氾濫に相次いで悩んでいた農民が、常泉寺に奇蹟し法力持っていた山伏に頼って水難除の祈禱してもらった。山伏は21日間祈禱を続け、満願の日に精魂尽きて倒れた。そして死に先立ちこの水神に手植の松を手向けたという。山伏の遺骸は、約5、60m離れた北東の段丘上に葬り、祠を立てて行者さまとあがめた。(山伏塚)」	1615洪水-D506	○釜ヶ淵の鯉(丸頭竜・大蛇の化身) ○山伏による水難除の祈禱 ○山伏の甲い(年々4月に仲林部落の人々が山伏塚にまつわるお祭りを行う)	元和元年／幕府が平阿満島(天龍村)に「白木改番所」設置 元和元年四月／大坂夏の陣で豊臣氏滅亡
1615	元和元年					○小鍛冶の矢文 「元和元年(1615)酒井新左衛門二男左太夫と、家来の庄右衛門が大坂夏の陣に出陣の際に天竜川が増水しておりやむなく対岸の小鍛冶より矢文にて次男左太夫の戦死を主家に報じた。明治17年、18年頃までは洪水のおりには実際には矢文で通信を行っていたという。」	1615洪水-D647	○洪水時の情報伝達手段	元和二年／遠山6ヶ村を継承していた遠山屋直が病死、遠山騒動と呼ばれる跡継ぎ問題が発生

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き
1618.6	元和四年五月		元和四年戊午五月大水(川路資料)	1573洪水 -730					元和四年／領地没収となり遠山郷が天領となる
1618.9.26- 1619.3	元和四年八月八日から元和五年二月まで		元和四年戊午八月八日霽翌年二月まで(川路資料)	1573洪水 -730					元和六年／和久氏が浪合、小野川、帯川、心川の4閘を幕府から預かるようになる
1620.8	元和六年八月		元和六年庚申八月洪水(川路資料)	1573洪水 -730					元和八年八月／キリシタン55名を長崎で処刑(元和大殉教)
1622.9.16	元和八年八月十一日		元和八年壬戌八月十一日大洪水(川路資料)	1573洪水 -730					
1624もしくは 1627	寛永元年もしくは 寛永四年					○堤防工事と百姓一揆 「寛永の大水(寛永元年と寛永四年、笹本氏の肩籠から寛永元年の洪水に関する可能性が高い)で数十町歩の田地流出、河原にあつた家二軒も流された。度々このような水害に見舞われたので、時の飯田城主脇坂様の家来である塩山次右衛門が和久平の彦右衛門にいつけて川除水惣普請をさせた。ところが、堤防工事の進める際、小百姓にばかりに不公平なことをさせたので、大騒動が起きた。」	1624 洪水- D589	○堤防工事にまつわる百姓一揆	寛永元年八月／徳川忠長に駿河、遠江、両国を加増(甲斐国と合わせ50万石)、駿府城主となる
1624.5	寛永元年四月		寛永元年甲子四月大洪水(川路資料)	1573洪水 -730					
1624.5	寛永元年四月		四月天竜川満水にて田島大水害あり、一部の高遠原へ上る。大田切・与田切の被害大(宮田村)	1624洪水 -786					
1626.4-9	寛永三年四月～八月	渇水	寛永三年丙寅四月～八月大旱魃草木枯る(川路資料)	1626渇水 -735					寛永三年／この頃から各藩で塩の専売制を開始
1627.9	寛永四年八月		寛永四年丁卯八月洪水(川路資料)	1573洪水 -730					寛永四年七月／幕府、京都諸寺出世法度を定める、紫衣勅許を無効とする(紫衣事件)

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き
1630	寛永七年		寛永七年庚午凶作五穀実らず(川路資料)	1573洪水 -730					寛永七年七月／幕府、ポルトガル貿易を2年ぶりに再開 寛永八年三月／浅間山噴火
1632	寛永九年	地震	寛永九年辛未地震(川路資料)	1586地震 -734					寛永九年九月／幕府、旗本諸法度を定める
1639.4	寛永十六年三月					○小川川をめぐる水利権争い 「伊久間村内伊久間原の余り水を小川川へ落としたこと(伊久間水除土手)から小川村との争いが起こった。」	D508	○災害がもたらす利権争い	寛永十六年七月／鎮国の完成
1641・1642	寛永十八・十九年	渇水	寛永十八、十九年大凶作、夏大旱魃、秋大風、数度に及び五穀実らず、野山に飢死者數返れず、犬猫も又餓死、人々食糧として草木根と掘り喰い、松の木皮を剥ぎ香き粉となし餅につく(川路資料)	1626渇水 -735					寛永十九年／寛永の大飢饉
1644頃	正保の頃					○深見の池伝説 「かつて、川路の目撃の池を埋め立てて新しい田を作ることになった頃、このあたりでは見なれない美しい娘がひとり、天童川の川沿いの道を深見の里へとやってきました。娘はとある農家を訪れ、手伝いを申し出た。ところが3日目朝、娘は井戸に水を汲みに行ったまま戻らなくなって帰ってこなかった。井戸端には娘の下駄が脱ぎ捨ててあり、村人が井戸をさがらさざりてみても見つからなかった。それからしばらくしたある日、晴れていた空がにわかにかき曇り、黒雲が広がる。稲妻が走り、大雨となつて深見の里一帯を真っ暗闇に包みこんだ。雷鳴が止んだ後、村人たちがはつとして辺りを眺めると、今まで言々としていた妻煙が見渡す限りの大池となつて、波が逆立っていた。村人たちは口々に「竜神さまのお怒りは」と言いあい、ただちに池の端に諏訪神社を祀り、毎年7月になるとイカダを組んで池に浮かべ、神楽を奉納して池の主を慰めることにしたという。また、池の底は深く龍宮に通じているともいう。」	1644 雷雨- D524	○種数ある深見の池の主伝説 (天龍村平岡宇連の大蛇) (天龍村神原のとうちやげの池の大蛇) (飯田市川路の貝鞍が池の大蛇) (阿智村浪合蛇峠の蛇が池の主)	正保元年十二月／諸國郷村高帳・國郡諸城の図(正保図)を制作 成させる

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き	
1645.6.17	正保二年五月二十三日					○諏訪市四賀桑原の鮎沢さんの「鮎沢系図」 「鮎澤肥前守六代之孫鮎澤源吾・孫右衛門・姉共二鮎澤村二而誕生、姉若橋原村へ嫁ス、此時正保二丙戌五月廿三日、蛇崩レニ而家屋舗不残押流され、右面人漸く命をたすかり闇夜橋原村姉之方江引越、正保三丙戌八月横川村江引移る、正保二兄十才、弟八才」 「鮎沢肥前守の六代の孫に当たる鮎澤源吾、孫右衛門は姉と共に鮎澤村(岡谷市川岸)において誕生した。姉は橋原村(同)へ嫁いだ。この時、正保二年五月二十三日(ユリウス暦=西暦1645年6月7日、グレゴリオ暦=西暦1645年6月17日)、蛇崩れによって家屋敷が残らず押し流された。源吾と孫右衛門の二人はようやく命が助かり、橋原村の姉の所へ引越した。その後正保三年八月に横川村へ引き移った。蛇崩れにあった正保二年に兄は十才、弟は八才であった。」	D723			正保元年十二月／諸國鄉村高帳・國郡諸城の図(正保図)を複製成させる
1647.6-7	正保四年五月					○般若島 「寛永元年(1624)に大峯山行者の慶芳院不源という者が、この地に堂宇を構えた。正保四年(1647)五月の洪水のおり堂宇が流されそうになった時、般若縫をとびとびに読んで流失を免れたという。ここから般若島と名づけられた。」	1647 洪水- D509	○般若島の由来 ○読経によるご利益	正保四年八月／幕府、ポルトガル船に通商拒絶を伝え、帰帆させる	
1648.4	慶安元年三月		慶安元年戊子三月出水、夏出水(川路資料)	1573洪水 -730					慶安元年二月／江戸市中諸法度を定める	
1649.7	慶安二年六月	地震	慶安二年己丑六月大地震(川路資料)	1586地震 -734					慶安二年二月／農民法度(慶安御触書)・検地案目を公布 慶安二年八月／大名・慶本のつら、地震等の非常時に登城する者を定める	
1650	慶安三年	地震	慶安三年庚寅洪水(川路資料) 慶安三年庚寅地震(川路資料)	1573洪水 -730 1586地震 -734					お蔭参りが流行	

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まわわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き
1652はじめ	承応のはじめ					<p>○今に生きている長左衛門「白河原の承応元年に奥山平太夫といわれるが開いた(北方南方面郷旧記)といわれる荒井川(用水)は度々山抜けが起こっており、百年も荒れつばなしになっていた。これを知った飯田町生まれの山本長左衛門は、北方村に住むようになつてから村民を救うために飯田城主の隣坊さまに河川工事を願いいれ、仕事にとりかかった。しかし、水を運そうとしたところ基礎工事が悪かったため、次第に水が溢れ、田畑を流してしまった。村民から恨みをかい、牢屋に入れられてしまった長左衛門は、獄中で設計書をつくり再び河川工事を開始して、とうとう水が流れるようになった。この功績により殿様からはおほほめにあずかり、村人から感謝され、もも人々の中で生きていくという。」</p> <p>○山本長左衛門婿徳碑 「新井川の工事を完成させた偉業を讃えて建てられた。」 ○荒井川 「笠松山麓近くの荒井川は度々の山抜けから「荒れる井」といった。」</p>	1652 はじめ -D522	○災害に挑む人の はじめ 姿と功績を後代に 伝える	承応元年一月／幕府、 代官の服務規程を定め る
1652.7	承応元年六月		承応元年壬辰六月出水被害甚大(川路資料)	1573洪水 -730					承応三年六月／玉川 上水完成
1654	承応三年		承応三年甲午洪水(川路資料)	1573洪水 -730					
1657	明暦三年		明暦三年丁酉大出水(川路資料)	1573洪水 -730					明暦三年一月／江戸で 大火(明暦の大火)
1660.5	万治三年四月		万治三年庚子四月十九日大洪水八日間に亘り 被害夥し(川路資料)	1573洪水 -730					万治三年六月／大阪 城火薬庫に落雷、民家 1500軒破壊 万治三年九月／諸国 大風雨・洪水

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き
1662.3.25-4.8	寛文二年二月六日より二十日迄		寛文二年壬寅二月六日より二十日迄日々赤く見ゆ (川路資料)	1573洪水 -730					寛文二年三月/方広寺の金銅の大仏、地震で倒壊のため、木造に替え、寛文八年よりこの編で文字縫製造 寛文二年五月/京畿大地震
1662	寛文二年	寛文地震				○大蛇が池 「大蛇が纏む池があったが地震で崩れた。 大蛇は和知野川を下って天竜川に出、千木沢川をさかのぼって深見ノ池をつくり移り棲んだという。」	1662 地震- D531	○寛文地震による 深見ノ池の崩壊史 実 ○大蛇、鬼ヶ城 (崩れに関係した地名。)	
1663.12	寛文三年十二月	地震	寛文三年癸卯十二月大地震(川路資料)	1586地震 -734					寛文三年五月/幕府、殉死を禁ずる
1670.2	寛文十年		寛文十年庚戌大洪水、米値段上る(川路資料) 1673延宝元年美丑大出水	1573洪水 -730					寛文十年/箱根用水完成
1674.8	延宝二年七月		延宝二年甲寅七月出水(川路資料)	1573洪水 -730					延宝二年/諸国風水害、凶作となる
1675	延宝三年		延宝三年乙卯凶作(川路資料)	1573洪水 -730					
1676.8	延宝四年七月		延宝四年丙辰七月洪水、秋凶作(川路資料)	1573洪水 -730					延宝四年三月/幕府、諸国の堤防決壊地巡察を命じる。 延宝四年/尾張、大風雨
1678.9	延宝六年八月		延宝六年戊午八月洪水(川路資料)	1573洪水 -730					延宝六年一月/江戸に大名火消を定める 延宝六年八月/江戸大地震
1680.7	延宝八年七月	渇水	延宝八年庚申七月洪水、秋より冬へかけ大旱魃(川路資料)	1573洪水 -730					延宝八年/諸国に水害おきる、この冬大旱となる
1681	天和元年		天和元年壬戌夏出水(川路資料)	1573洪水 -730					

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き
1684	貞享元年		青木川の洪水で山崩れ地欠けがあり、土砂を押し流して耕地埋没	1684洪水 -707					貞享元年三月／山城・大和・摂津・河内・近江に治水条例をだす
1684.4.6	貞享元年二月二十二日		貞享元年甲子二月二十二日大流量空に声あり雷の如し(川路資料)	1573洪水 -730					
1691.5	元禄四年五月	前線	元禄四年辛未五月霖雨溢し、八月大洪水にて堤防切込大事(川路資料)	1573洪水 -730					
1691.6	元禄四年六月	前線				○大田切川の川陰林 「元禄四年(1691)の五月の霖雨、六月には大滝川に洪水があり、伊那谷に大きな被害がでた。この年、大田切川と大滝川との合流点に二十数歩にわたって楲林がなされた。長さ七百間・幅百間は戦後まで残存したが、現在は伐木開墾されて水田地帯に変わり、県立西駒郷ほかの施設中にわずかに松林の面影を留めている。」	1691 洪水- D590	○大田切川の川陰林の史実	
1693-1936	元禄六年～昭和11年								
1693.8	元禄六年八月		元禄六年癸酉八月洪水(川路資料)	1573洪水 -730					
1699	元禄十二年	台風	元禄十二年乙卯大風雨(川路資料)	1573洪水 -730					
1701.9	元禄十四年八月		元禄十四年辛巳八月洪水、凶作にて餓死するものあり(川路資料)	1573洪水 -730					
1705.8.16-17 8.31	宝永二年六月二十七日から二十八日、七月十三日	前線	宝永二年乙酉六月二十七・二十八日洪水、七月十三日再出水、田畑流失夥し(川路資料)(天竜川洪水史)(二巻)	1573洪水 -730					
									元禄十二年九月／諸国暴風雨による凶作のため、酒造額を前年の5分の1とする
									元禄十五年十二月／赤穂浪士の打ち

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き
1707.6	宝永四年六月		宝永四年丁亥六月出水(川路資料)	1573洪水 -730					宝永四年／善光寺再 建
1707.10.28	宝永四年十月四日	宝永地震	高森町下市田の上原彦右門の「歳中行事」によ れは、「十月四日晴天 朝庄右衛門二被預代か きに行 次右之門之門二而伝兵衛彦五郎二遠 孫右工門行 午下刻(午後一時)申酉(西南西) 方より大地震おびただしき事近年希成事共也 我家の下道動り破壊さ七間程 其外東山々のな ぎ一同二方々崩 土煙四方に立ち見ゆる」と記録 が残っている	1707宝永 地震-704	M8.4、国内最大級の地 震、全国で死者2万人、潰 家6万戸、流失民家2万戸				宝永四年十一月／富 士山噴火、宝永山でき る、江戸にも火山灰が 降った
1707.10.28	宝永四年十月四日	宝永地震	飯田城大破、追町の石垣崩、御門の戸不立、追 町鐘付堂の石垣崩れ、時の鐘27日より太鼓に姿 変わる。城内の石垣残らず崩、権四郎門の石垣崩 れ、居所潰れ。山本村、松下日向守様御領、近 藤宮内様御領、家敷223軒、全潰れ159軒、半潰 れ55軒、死人5人。飯田領分2万石之内 町・在、 全潰れ315軒、半潰れ57軒うち町方 全潰れ40 軒、半潰れ80軒(役用古記録妙帳)	1707宝永 地震-710	M8.4、国内最大級の地 震、全国で死者2万人、潰 家6万戸、流失民家2万戸				宝永四年／善光寺再 建
1707.10.28	宝永四年十月四日	宝永地震	御番所潰れ、3軒潰れ、けが人5名(遠山影政氏 文書)(天龍村)	1707宝永 地震-725					宝永四年十一月／富 士山噴火、宝永山でき る、江戸にも火山灰が 降った
1707.12.16	宝永四年十一月二十三日	降灰	所々ゆりわり丸竜岳寺庫裏潰れる、下條村付近で は、1~2メートル程の地割れができ水が流れて た(下条村)	1707宝永 地震-721					
1707.12.16	宝永四年十一月二十三日	降灰	高遠城郭破壊の場所多し(高遠町)	1707宝永 地震-757					
1708.8.20	宝永五年七月五日	台風	富士山爆発により灰が高遠まで降り農作物埋没 (高遠町)	1707降灰 -758					宝永五年一月／幕府、 富士山噴火による降灰 地救恤費用を全国に賦 課する
1708.10.14	宝永五年九月		宝永五年戊子九月五日大風吹く(川路資料)	1573洪水 -730					
1708.10.14	宝永五年九月		宝永五年戊子九月洪水(川路資料)	1573洪水 -730					

西暦	和暦	誘因	被害の事態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き
1711	正徳元年九月		正徳元年辛卯九月満水(川路資料)	1573洪水 -730					正徳元年七月／九州・ 東海地方大風雨
1712.9.19	正徳二年八月十九日		八月十二日より雨降、高五千二百余石が水押し 湛当荒、高百石余が永荒、所々川除提切口が三 千四百九十間余、潰家が四十軒、半潰が七十七 軒、入水家が百九十九軒、所々落が五十二ヶ所 (諏訪郡)						正徳二年四月／長雨、 美濃洪水 正徳二年七～九月／ 諸国長雨による洪水
1715.7.17	正徳五年六月十七日		高遠風雨強く川々満水、領内にて橋三十六ヶ 所、二十三戸流失	1715未満 水-756					
			正徳五年乙未六月十七日から二十日何百年来 の満水とも例え様なし、古今稀有の大満水(川路 資料) 二十三日竹佐御役所より平沢沢唯右衛門外二名、 御役人與一外一名検分(川路資料)	1573洪水 -730					
			大河原・梅塩面山水場にあった材木が、山崩れ、 出水で埋没または流散	1715未満 水-708					
			上穂町の安楽寺が流失(駒ヶ根市)	1715未満 水-754	六月十八日の午後二時 から二十四日まで豪雨が 続き、鳳越山、安平寺な どの諸山が崩れ大洪水を ひきおこした。				正徳五年一月／海舶 互市新例(正徳新令)
1715.7.18-7.24	正徳五年六月十八日 ～二十四日		六月十七日より二十四日迄伊那谷未曾有の大 雨降り(未満水)中央アルプスの崩落により土石 流が押し出し出砂原を形成	1715未満 水-787					
			野鹿川が氾濫						
						○前亡後死三界万霊の碑 「正徳五年(1715)の未満水の時に流死し た人の供養のため、市田村の古刹安養寺 二世了遠(市田村羽生勝朗氏)が主唱と なって建立した。安養寺の過去帳には、正 徳五年六月十八日洪水、田島前沢より下 は松川の間の田畑大損言人馬流死するも の多し、と記されている。」	1715 未満 水- D592	○被害者の供養費	

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き
1715.7.18-7.2	正徳五年六月十八日 ～二十四日				六月十八日の午後二時から二十四日まで豪雨が続き、風越山、安平寺などの諸山が崩れ大洪水をひきおこした。	<p>○徳木さまの碑 「正徳五年(1715)のひつじ満水の後、徳本和尚が洪水で亡くなった人の菩提を弔ったという。」</p> <p>○出砂原(高森町) 「正徳五年(1715)の未満水の時、大鳥山から天竜川に注いでいる大鳥川が満水となって土石流が発生し、大量の土砂が押し出されてきた。」</p> <p>○夜泣き石 「正徳五年未満水の時(1715)、大鳥川から運ばれたと伝えられている。」</p> <p>○正徳五年当時の歌 「千早振る神代も聞かず野底山天王原に水上がるとは。」</p> <p>○北原の土石流 「正徳五年(1715)の大洪水で、下久堅北原の裏の洞が一時でぬけてきた。その際、天竜川の流木が多かったので、川端にそれを拾いに行った人たちが多く、虎岩の五右衛門と和久平の助次郎が流されて行方不明となった。」</p> <p>○正徳五年未満水の時、大宮の丘陵に逃げ集まり、大宮諏訪神社加護を祈願したところ、水勢一変し、北は野底川に南は松川に二分されて飯田城市の災害を免れたという。 ○式年祭(おねりまつり) 「正徳五年未満水の時、大宮諏訪神社高台に逃げた人々が、一心に祈願をこめたところ、水勢が一変して飯田台地が大難を免れた故、飯田全町の喜びは限りなく報徳が敬神となり、全町あげての大祝祭を行うのが慣例となった。七年目千支の申年と寅年の四月一日から二夜三日間行われる。」</p>	<p>1715 未満水-D595</p> <p>1715 未満水-D593</p> <p>1715 未満水-D552</p> <p>1715 洪水-D555</p> <p>1715 未満水-D591</p> <p>1715 未満水-D512</p>	<p>○犠牲者の追悼</p> <p>○災害によってつけられた地名</p> <p>○災害がもたらした地物</p> <p>○当時歌われた歌</p> <p>○二次災害の教訓</p> <p>○諏訪神社(風水害鎮護の神)の報徳</p>	<p>正徳五年一月/海船互市新例(正徳新令)</p> <p>正徳六年五月/享保改革</p>
1716.9.2	正徳六年七月十七日		諏訪湖大満水、角間川百年にもなき大満水	1716洪水-773					

西暦	和暦	誘因	被害の姿態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き
1718.8.22	享保三年七月二十六日	遠山地震	M6.4、高島城で石垣2ヶ所崩	1718遠山 地震-700	和田盛平山の一角(北西斜面)が崩れ落ち遠山川を堰き止め、同時に主峰から分離した出山が出現、遠山川は湖水となり突然ダムを形成し、その後西方へ決壊し広い河原をつくった。遠山川は何町も西に移動して現在の流路をとることになった、また片町家の5人が石に打たれて死亡(遠山峡谷に出山を造りたる享保地震史料)				享保三年七月／鷹匠の廻村中の不法を禁ずる、無断の鉄砲打を禁じ訴人の養育規定を定め、公布する。鳥類減少のため、鶴、白鳥、雁・鴨の私の贈答・食料とすること。以後3年間禁じ、江戸市中の鳥問屋を10人に制限する
			高遠城の内外や侍屋敷など破損	1718遠山 地震-701					
			龍淵寺が大破(和田村龍淵寺過去帳)	1718遠山 地震-713					
			駒場で64軒中32軒全壊、32軒破損、上中閭駒場社が半壊し石の鳥居が破損(阿智村)	1718遠山 地震-720					
			然所去七月二十六日大地震に而御番屋石垣共建家井悉震潰し山崩二而押埋申候(天龍村遠山家文書)	1718遠山 地震-726					
			鷹巣村の枝郷を合わせて山や田畑石垣残らず崩れ、家屋破壊して二〇人余りの怪我人が出て内七人が死亡(鷹巣宏重氏文書)						
			地震発生と同時に山から跳ねてきた石に当たって死んだ人は坂部と隣村の愛知県富山間で五十人余(熊谷家伝記)						
			四方の山大分崩れる。潰家は新井村で3軒、吉岡で2軒、台原上ノ原で5・6軒あり、大山田神社拜殿が潰れる。龍岳寺庫裏潰れる(下条村)	1718遠山 地震-722					
			村内20ヶ所でなざがが発生し、上田三畝、中田二反畝廿歩、下田七畝余、上畑二畝廿歩、原畑二反五畝余りがつぶれてしまい、男二人・馬一疋が埋められて死んだ(古城村震災書上帳)(下条村)	1718遠山 地震-723					

西暦	和暦	誘因	被害の概観	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き
1718.8.22	享保三年七月二十六日	遠山地震	新木田村きび島と申所、山落、天龍水を打留め、八時より暮れ六時まで水少しも通らず大島村へ水つかへへ…(大地震之記) 飯田領中、潰家350軒余、半潰580軒余、死人12人、死馬6疋(役用古記録帳) 城内六分破損、町・在の清水(ほり井の水とまゐる、家蔵過半潰れ(永代万覚日記) 御城内惣廻り崩、矢倉、石垣等大破。御町、在々潰家、死人、けが人あり、家中屋敷数多大破(郡方覚書より) 30戸の野池のうち5戸全潰れ、25戸は破損。井堰、溜井、掛樋6箇所とも破損(野池の書上帳)	1718遠山地震-724	M7.0、飯田市南信濃和田にある盛平山が崩れ、遠山川を堰き止めその後決壊し広い河原ができたり、主峰から分離した出山が出現するなど、遠山川の流路を変えたるほどの地変をもたらした				享保三年七月／鷹匠の廻村中の不法を禁ずる、無断の銃砲打を禁じ訴人の褒賞規定を定め、公布する、鳥類減少のため、鶴・白鳥・雁・鴨の私の贈答・食料とすることを以後3年間禁止、江戸市中の鳥問屋を10人に制限する
1718.8.22	享保三年七月二十六日	遠山地震		1718遠山地震-711	M7.0、飯田市南信濃和田にある盛平山(森山)の西方斜面が崩壊し、丘死者5人を出した。崩壊土砂が北側の押出し沢から流出した土砂とともに、遠山川を堰止め、「出山」(和田小学校北方の小峰)とよばれる小山をつくり、天然ダムを形成した。天然ダムは、およそ1週間後に決壊し、一夜で広い河原をつくった(現夜川瀬部落)		1718遠山地震-D615	○地変による地名の由来	享保三年七月／鷹匠の廻村中の不法を禁ずる、無断の銃砲打を禁じ訴人の褒賞規定を定め、公布する、鳥類減少のため、鶴・白鳥・雁・鴨の私の贈答・食料とすることを以後3年間禁止、江戸市中の鳥問屋を10人に制限する
1719.9.28	享保四年八月十五日		八月十五日大洪水(亥の満水)被害頗る多し。(養阜村)七月・八月、諏訪湖折々満水	1719洪水-788					享保四年十一月／相対済し令
1722	享保七年		享保七年壬寅凶作、世上騒然						享保六年八月／評定所門前に目安箱を設置 享保七年七月／上げ米の制、新田開発奨励

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意識	社会の動き
1723	享保八年		享保八年癸卯八月出水						享保八年六月／足高の制を定める
1724.9.22	享保九年八月六日	台風	享保九年申辰八月六日大風雨被害大、米植段十面に付き四十五俵(川路資料)	1573洪水-730					享保九年八月／代官の川除普請の見積もり過大を戒告する
1725. 8. 14	享保十年七月七日	地震 (高遠地震)	M6.1の地震で高遠城に崩壊あり(享保10年の地震で高遠城崩壊箇所を幕府に報告した城図より)	1725高遠地震-755					享保十年十月／新大判(享保大判)を鑄造して十二月より通用
1726.5-6	享保十一年五月		大地震で高島城が大破、本丸22カ所・二之丸4カ所・三之丸6カ所・大手門ほか9カ所石垣崩、大祝家御屋敷大分に損し在郷方大分家潰れる	1725高遠地震-786					
			大洪水、家屋七戸流出、蛇抜け十五谷(清内路村)	1726洪水-719					
			五月十八日より諏訪湖大満水	1726洪水-789					
1726.6.17	享保十一年五月十八日		大洪水で鍛冶ヶ島の十四戸が流出し表木村へ集団移住	1726洪水-790		○鍛冶ヶ島流出と集団移住 「むかし、現在の伊那市下牧の護災堤防から国道153号線との間に鍛冶ヶ島とよばれる島があった。鍛冶職人が多く住んでいたが、享保十一年(1726)の大洪水で高一四四二石の田と14戸の家全部が流出し、住人は表木村(現伊那市西春近)へ移住した。鍛冶ヶ島新田家居達のこらず流れつくし、立つ所もこれなき体、本村へ上り所どころの野つれ、または諏訪形原の街道筋へ小屋がけいたし、田地これ無き者ども少々売の家等を致し一日を送り戻し合いに候て、本村ともの困窮。(殿島の大西家文書)」	1726洪水-D596	○洪水による集団移住	
			清内路村で蛇抜け十五谷	1726土砂-791					
1726.7.23	享保十一年六月二十四日		上清内路大川入りひえ畑沢じゃぬけ、三四郎・竹右衛門いえこわれ、長三郎・伊三朗所々いたみ申し候	1726土砂-744					

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社金の動き
1727.7.8	享保十二年五月二十日		鴨の沢のほり沢より抜け出申し候(清内路村)	1727土砂 -745					
1728.9.16	享保十三年八月十三日		享保十三年戊申八月十三日洪水、田畑流失多し 秋凶作(川路資料) 方々山々大水・大ぬけ仕り候、大橋迄水つき橋も たせ候。(清内路村)	1573洪水 -730 1728土砂 -746					享保十三年九月／閏 東水害、江戸の両国橋 流失
1733	享保十八年		享保十八年癸丑洪水、大凶作餓死するもの多し (川路資料) 元文三年戊午大満水、家屋流失多し(掛塚町誌)	1573洪水 -730					享保十七年九月／享 保の大飢饉
1738	元文三年					○うしろ向となった弁天様 「洪水による地形の変化により、島田村(飯 田市松尾)と虎岩村・知久平村(飯田市下 久堅)との間で境界論争がおこっていた。 1738年(元文三年)の洪水の後、大岡越前 守の裁きにより、弁天様が島田村のものとな った。ところが、弁天様は天童川の裏側 にお好きとあって虎岩村、知久平村の方は かり向いていた。怒った島田村の衆が、弁 天様を島田村の方に向けたところ、村内で 悪い病気が守くに治まったので島田村で は、社殿のうしろから拝むようになった。ま た弁天様はどんな洪水の時でも流失したこ とがなかったが、36災害の時に流されてし まった。今ではもとのところに祀られてい る。」	1738 洪水- D526	○弁天様の流出	
	近世					○藤川除 「釜無川の洪水から護るため、鳶木宿の宿 中近く、甲州街道に沿って造られた。」	D546	○水防技術の継承 ○武田氏支配の歴 史と甲州流治水工 法の取入れ	
	近世					○信玄塚(風切・風除) 「鳶木宿を二重に護るため大樹を植栽した 築堤。」	D501	○水防技術の継承 ○武田氏支配の歴 史と甲州流治水工 法の取入れ	

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まっわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き
1742.8	寛保二年八月		寛保二年壬戌八月天竜満水、川除堅杵困を普請す (岩村田誌)						寛保二年二月／幕府、河川沿岸の伐木・開墾を禁ずる 寛保二年八月／江戸及び関東東地方大水害、松代・小諸などの諸城大破
1744	延享元年					○境界紛争と見直し様 「天竜川と三峰川の合流する付近一帯は、洪水の度に川筋を変え、川筋を挟んだ地区の境界紛争が絶えなかつた。江戸時代の270年間で90回も洪水や満水を引き起こし、狐島村と対岸の荒井村・西町村では、延享元年(1744)の出水時に決めた約定書と絵図面がある。その絵図面には、境界を復元するための八箇所の測量基準の一つに「長石衛門社木榎」が記録されており、現存する唯一の基点となっている。」	1744 洪水- D597	○洪水による村の境界紛争と基準点の現存	延享元年／田畑永代売買の禁令を緩和
1750	寛延三年					○理兵衛堤防 「田島村の名主松村理兵衛忠放が、度重なる天竜川の水害から田島を護るために私財をなげうち、尾張から石工を呼んで堤防工事を始めた。工事中に何度も水害に見舞われ、至難を極めたが、理兵衛の孫の三代に渡り58年間で3万両もの莫大な費用をかけて堤防が完成した。平成18年7月豪雨の際、洪水の跡に理兵衛堤防の石積が発見されている。」 ○天流功業義公明神碑 「理兵衛の功績を讃え、文化12年に建立され水神様として祀られている。」	1750- D626	○水害に挑んだ人の姿と功績	寛延三年一月／幕府、農民の強訴・徒党・逃散を厳禁する

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き
1752	宝暦二年		宝暦二年壬申堤防大破、死亡者夥し(岩村田誌)			○惣兵衛堤防(大川除堤防) 「安政六年(1859年)、旧堤に続いて下流へ延長六〇間の大川除接続堤防竣工。文久三年(1863年)、大川除接続堤防修復工事を実施。元治元年五月(1864年)、大川除堤・同接続堤防における天童川洪水による欠損修復工事(捨石のあらし込み)の開始。昭和9年3月(1934年)、延長100mの惣兵衛堤防木工工沈床入れ替え工事を竣工。昭和36年6月29日(1961年)、午後五時半に惣兵衛堤防700mが決壊し、市田水田のおよそ8割が浸した。」 ○惣兵衛の人柱 ○妻わら堤防(惣兵衛の末孫中村初太郎翁談片)	1752-D641	○水害に挑んだ人の姿と功績	
1753	宝暦三年					○上横川神社の神楽の由来 「宝暦三年(1753)、川島の谷では田植えが無事に終わった。ところが、春から一滴の雨も降らなかった。夏になっても雨は降らず、横川も一筋の細い糸のような流れになった。水がすっかりなくなり、田はひび割れ、食べ物が村人に襲いかかった。この凶事は神様の祟りと思った村人は、お伊勢様にお願いしようとする若者を伊勢への旅にだした。伊勢神宮にたどり着いた二人は一心に祈り、神官に村の事情を伝えた。神官の紹介してくれた又右工門と七之丞という神楽師ともども村に戻り、一軒一軒お払いをもらった。村人達は神楽師の後を追い、お願いをし、自分たちのように喜んでお願いをし、自分が通じたのか、その日の夕方から大粒の雨が降り出した。平和で豊かな村がよみがえり、村にどどまると神楽師達にもお願いをした。しかしその願いは川島に入れもえなかつたが、神楽師達は川島にし獅子舞を残し、獅子舞のやり方を伝えていった。こうして獅子舞は二百年以上も毎年毎年行われ、代々伝えられてきた。今では上横川神社神楽保存会の人々が、後代に伝えるよう努力している。」	1753-D641	○早蕨の虫と今に伝える神楽の雨 ない	宝暦三年十二月／木曾川治水工事を薩摩藩に命ずる

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き
1756.10.26	宝暦六年十月三日		宝暦六年丙子十月三日満水、米値段上る(川路資料)	1573洪水 -730					宝暦六年九月／近畿・東海地方大洪水
1757.6	宝暦七年五月			1569洪水 -732	小川湯沢前から小山川大氾濫となり、島居前藤やぶ、下一帯被害ことに多し				宝暦七年十二月／洪水等による出費増大により、幕府が諸部局の俵約を命ずる
1757.6.20	宝暦七年五月四日		宝暦七年丁丑五月四日天童川の大水宿方堤切込、五日夜小立野村堤防家屋水押通日数二十一日(二俣五月二日から六日、五日間家屋浸水、二俣誌)(井通村誌)						
1758	宝暦八年					○祇園祭(7月14日) 「洪水と悪疫の流行を水神の祟りと恐れた村人が、姫主松平堪津守に願い出て尾張津島社をこの地に迎え入れた。」	D512	○水神の祟り、尾張津島社の受入れ、祇園祭	宝暦八年六月／関東・東海道・美濃・伊勢・甲斐の河川工事を完了する 宝暦八年七月／宝暦事件
1765.6	明和二年五月		明和二年乙酉五月大満水、八月四日大水(川路資料)	1573洪水 -730					
1768.5	明和五年四月		諏訪湖大出水	1768洪水 -774					明和四年八月／明和事件
			宮田村水三尺程	1768洪水 -792					明和五年四月／明和四文銭鑄造
1773	安永二年九月		安永二年癸巳九月朔月大出水(川路資料)	1573洪水 -730					安永元年／木綿が普及する
1778.6	安永七年五月中旬		五月中旬より諏訪湖度々満水、八月大満水、下地通り收穫皆無	1778洪水 -775					安永七年二月／江戸大火 安永七年三月／幕府、懷物生産を奨励
1779.10.4	安永八年八月二十五日		五月諏訪湖満水、その後度々、別して八月二十五日大満水、小和田通り岸六十軒水漬れ	1779洪水 -776					安永八年十月／鹿児島・島根・鳥取・火、伊豆・大島・三原山噴火

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き
1782	天明二年		天明二年壬寅天竜川氾濫、磐田郡光明村萱屋 過半数流失(光明村誌)						天明三年七月／浅間 山火噴火、飢饉つゞ
1782.8.16	天明二年七月八日		諏訪湖大満水、見出大不作	1782洪水 -777					
1784.1	天明四年正月		天明四年甲辰正月飯米沸度、草木根を喰う(川 路資料)	1573洪水 -730					天明四年一月／浅間 山噴火罹災地方の河 川諸普請の助役を熊本 藩に命ずる
1787	天明七年		天明七年大凶作餓死する者あり、他国に乞食と なつて出する者あり行脚、無縁仏塚出来る 有名な天明の大飢饉、時侯、下川路、立委川、 普請、駒沢、切所に大猪之子七組をくむ(川路資 料)	1573洪水 -730					天明七年七月／寛政 改革始まる
1789	寛政元年		小川川満水にて湯屋付近の田地流出	1569洪水 -732					
1789.6	寛政元年六月		五月中諏訪湖満水						
1789.7.9-10	寛政元年六月十七日～十 八日		六月十七日～十八日天竜川満水(西満水)						
1789	寛政元年					○阪本天山の墓田の碑 「寛政元年(1789)天竜川の大氾濫により、 大久保の辺り一帯は荒地と化した。中村新 六は阪本天山につき美字を修め、天明の 飢饉に発奮し、階道を穿ち堤防を築き、数 町歩の美田を開くという大業を成し遂げた。 その功績をたたえ建立された碑には、大窪 郡中野氏墓田隣記天山眞逸源後彦撰、と 碑文が彫られている。碑は花崗岩で現在 風化が進み文字の判読はできない。」	1789 洪水- D598	○治水事業の功績 を讀える碑	寛政元年九月／旗本・ 御家人救済のために業 損令をだす

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き
1789.7.10	寛政元年六月十八日		寛政元年巳酉六月十八日天竜出水、本村大半水中に没す、酉満水という十一月御用材下る(川路資料) 六月十八日の満水で田畑が押流れ、川次け、山崩れとなった、家八軒が埋まり難儀している、復旧が困難であるから急ぎ見分してほしい(長沼松島村の届出)	1573洪水 -730 1789酉満水-727					寛政元年九月／旗本・御家人救済のために棄損令をだす
1804.10.8	文化元年八月二十九日		文化元年甲子八月二十九日大満水、本村浸水夥し、子満水と称す(川路資料)	1573洪水 -730					文化元年九月／ロシア使節シザノフ、通商を要求する
1804	文化元年		古蒔地及び文化元年の荒地(紅葉川上流7ヶ所、種ヶ沢上流2ヶ所、二庵沢1ヶ所、塩田川上流1ヶ所)※龍東水害の地図より(龍江村)	1803洪水 -747					
1807	文化四年		文化四年丁卯満水あり、篝屋出頭(川路資料)	1573洪水 -730					
1807.7.6	文化四年六月一日		五月晦日より六月一日、諏訪湖大満水、岡田一面に水がかかふる	1807洪水 -778					文化四年四月／樺太およびエトロフ島にロシア船来航、上陸乱妨
1807.10	文化四年九月		三峰川川除決壊人家浸水32軒、棟数96棟						

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き
1808.9.15	文化五年七月二十五日					○竜の腹の皮を拾った話 「雷が激しく鳴り出し、山や林がゆれ動き、天は傾き地がさげんな折れて目も当てられないほどであった。吉田村(高森町吉田)の与市は、竜の皮を拾い、隣の山吹村のものが山で同じようなものが落ちていたと聞いた。大きさは五尺六寸四方ばかり、青白く光沢があり、ありありとみたいもので、天にいた竜がたたかたときの腹の皮だという。」	1808 風雨- D521	○闘竜にたとえた自然現象	文化五年八月／フエーン事件
1810.4	文化七年三月		三峰川、天竜川合流点に8尺増水	1810洪水 -793					
1816	文化十三年		文化十三年丙子一色村富岡、国吉、八幡、高蘭の各所破壊、田圃過半荒蕪に属す。(川路資料)(天竜川水防史)	1573洪水 -730					文化十三年八月／畿内・東海道風雨洪水
1821	文政四年					○水上様 「文政四年(1821)に檜洲に祀られた。檜洲は天竜川にある満島の船着場であったが、現在は平岡ダムの完成により水の枯れた河原となっている。」	D578	○ダム建設により消えた水上様	文政四年八月／近畿・山陰・東海大風雨に見舞われる
1825	文政八年		文政八年乙酉夏長降りにて凶作、米値上る(川路資料)	1573洪水 -730					文政八年二月／幕府、奥国船打ち払い令を出す
1827	文政十年四月八日		文政十年丁亥四月八日出水、六月二十三日大出水、七月一日出水(川路資料)	1573洪水 -730					文政十年二月／文政改革
1828	文政十一年五月		文政十一年戊子五月出水、七月一日大満水、古寺下の叶屋方の井戸まで浸水(川路資料)	1573洪水 -730					文政十一年十二月／シーボルト事件
1832	天保三年		土用前、諏訪湖満水、その後大ひでり	1832洪水 -779					天保四年十二月／天保の飢饉、天保十年まで続く

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き
1835.3	天保六年二月末		天保六年二月末天竜川堤防破壊、全村浸水、失家屋が多かった(池田村誌)						
1841.5.12	天保十二年三月二日	地震	天保十二年辛丑三月二日地震あり、十七日大水(川路資料)	1586地震 -734					天保十二年十二月／ 株仲間解散令
1842	天保十三年					○栗沢川の河川工事 「むかし栗沢川は市野瀬部落の中を流れていて、この川は洪水になるとしばしば氾濫し、部落は被害を蒙っていた。天保十三年(1842)に城山の頂の屋根を掘りぬいて切り通しを造り、栗沢川は市野瀬と成り、三峰川に流れ落ちるようになった。これにより、部落は災害から免れるようになり、田んぼの数も相当に増えたという。」	1842- D528	○洪水による荒地 跡	
1847.4.21-22	弘化四年三月七日～八日	地震 (善光寺地震)	弘化四年丁未三月七日・八日大出水、三月地震(善光寺地震と称す)(川路資料)	1573洪水 -730					
1848	弘化五年		M7.4、雨戸障子はずれ、下金子に被害、薬師堂、大いにいたみ(諏訪市)	1847地震 -781					
1848	弘化五年		十日～十三日の大雨で所々なぎ落ち、松島こせ上の畑が崩れ、馬屋と部屋つぶれる、栃島の家一軒はなぎが抜けて半分つぶれる	1848大雨 -729					弘化五年一月／松代藩、佐久間象山に洋式野砲3門を鑄造させる
1850	嘉永三年四月		嘉永三年庚戌四月竹に実なる、七月二十一日洪水、八月九日大出水(川路資料)	1573洪水 -730					嘉永三年十月／高野表英、幕吏に囲まれ自殺する
1852.9.29	嘉永五年八月十六日		大洪水、上殿島村へ三峰川切込む(伊那市)	1852洪水 -760					嘉永五年十一月／大塚大火

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き
1854.12.23・ 24・26	嘉永七年十一月四日・五 日・七日 安政地震	安政地震	M8.4、下金子19軒大破潰れ家(諏訪市) 赤沼25軒大破潰れ家(諏訪市)	1854地震 -782 1854地震 -788					安政元年三月／ペリー と日米和親条約を締結 調印、下田・箱根の2港 を開く
1854-1860頃	安政～万延の頃					○特産品の寒天 「相次ぐ災害により農業・土産離れがおこっ たが、村を出ることのできない長男や女た ちは和菓を総り、災害の少ない冬の時期に できる仕事として寒天作りをはじめた。」	安政・ 万延 洪水- D502	○災害がもたらした 副業の恩恵(宮川の 寒天)	
1854.7.31	安政元年七月七日		安政元年甲寅七月七日洪水被害大(川路資料)	1573洪水 -730					
1854.12.23	安政元年十一月四日	安政東海地震	薬師堂(高森大島)の五重塔、石灯笼、石塔が残 らず倒れる。(村方先規例式書留帳) 所々山崩れ岩落、古家などはつぶるもあり(浅野 村佐々木求馬地震記)(阿南町)	1854安政 東海地震 -705 1854安政 東海地震 -722					
1854.12.23	安政元年十一月四日	安政東海地震	飯田町、大妻の地震にて、潰家3軒即死3人、家 蔵の損じ方蜘蛛のほか大妻、凡そ土蔵のいがみ 或いは壁落ち、そのほか大いたみどころ数知 れず(南信地方考) 午中に揺れ始め、連続的にやってきたので、 家に起臥することができないので、竹やぶあるも のは、その中にはいり、十日余りもこうした状態 が続いた。被害は飯田だけでも破壊家屋が589 軒もあり、飯田城主は救済のため飯田町に金三 百両を下附された(飯田世代記) 11月4日存じ外の大地震に任り、稲荷社は徹震に破 壊成され、大地震に付稲荷社地決壊本社乃大 破、其の上所手振に相成り、再建相成りがたく (松下惣四郎翁日記)	1854安政 東海地震 -712					安政元年三月／ペリー と日米和親条約を締結 調印、下田・箱根の2港 を開く

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き
1857.5.20	安政四年四月二十七日		安政四年丁巳四月二十七日洪水(川路資料)	1573洪水 -730					
1857.6.6	安政四年五月十五日		五月十五日より諏訪湖大満水、福島・文出・小川などの者船で飯をたぎ、島崎お屋敷水漬、湖水定水より七尺二寸高の満水、史上未嘗有の洪水	1857洪水 -780					
1857.6.8	安政四年五月十七日		三峰川大洪水						
1857.6.9	安政四年五月十八日		安政四年丁巳五月十八日大満水、村人子午(文政十一年)以来の大水(川路資料)	1573洪水 -730					安政五年六月／日米 修好通商条約調印
1857.9.17	安政四年七月二十九日		三峰川大洪水						
1857.9	安政四年八月		安政四年丁巳八月朔月又大出水、本年米値段騰貴す(川路資料)	1573洪水 -730					
1857.9.18	安政四年八月一日		三峰川大洪水						
1860.6	安政七年五月		四月諏訪湖大満水、五月末諏訪湖大満水、水の高さ田辺三尺・文出四尺・小川五尺、三十日の長雨	1860洪水 -781					
1860.6.29	万延元年五月十一日		万延元年庚申五月十一日大満水、十五日大水、三月から七月雨太多く凶作、六月二十八日天雷川下流出水(川路資料)	1573洪水 -730					万延元年三月／椋田 門外の変
1860.7-8	万延元年六月		下平本田・下河原・河原窪・清水田 計五反三畝二歩、古新田・田五畝歩・子新田 計三反三畝七歩、総反別 八反六畝九歩分、米ノ合計 八石九斗六升五合(万延元年六月川次荒所書上帳)	1568洪水 -732	川次				
1861.3.23	文久元年二月十三日	地震	文久元年辛酉二月十三日地震、凶作(川路資料)	1573洪水 -730					

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き
1865.6.10-11	慶応元年五月十七～ 十八日		慶応元年乙丑五月十七・十八日近年稀なる大満 水、正徳の未満水より150年目(川路資料)	1573洪水 -730					慶応元年五月／第2次 長州征伐
1865.7.9	慶応元年五月十七日	豪雨	田沢川上流部で山崩れ発生、一時天然ダム形 成。決壊後、追分で家屋流失・埋没等の被害	1865豪雨 -706					
1865.8.8-9	慶応元年六月十七日～十 八日		六月十七日～十八日天童川大洪水(乙丑満 水)、正徳五年未満水以来、百五十年目の大満 水						
	江戸時代末期頃					<p>○蛇ぬけの穴 「赤坂沢の入悪沢にある淵に三百年も生え とる杉の木のように太くて長い一匹の大蛇 が棲んでいた。大蛇は穏やかなたちで人の 前にはめったに姿を顕さなかった。村人は 横川川の上の沢に構んでいるから、川を 守ってくれていると信じ、淵にはめったに立 ち入らなかった。ある年長雨が降り、二十 日間も振り続いた。川の水が何十倍にもふ くれあがり、大蛇の棲む淵も地面がドトッと 崩れた。その時さすがの大蛇も川の中に投 げ出され、のたうちまわったが、踊りくるっ た横川川へ飲み込まれ、真っ黒い水や大 岩と一緒にすこい勢いで押し流されていっ た。次の日大雨がうそのようにピタリと止 み、空はカラリと晴れあがった。村の衆が 入悪沢の淵まで来た時、地面の滑った後 にボツカリとあいた大蛇の巣穴を見つけ た。村の田畑はひといめにあったが、村人 は誰も流されなかった。大蛇が身代わ りになってくれたと思った。それからこの辺り では大雨が降ると、蛇ぬけするほどの大雨 にならんといいがな、と言うようになっ たという。」</p>	江戸 末土 砂- D639	○身代わりになった 入悪沢の淵の大蛇	慶応三年十月十四日 ／大政奉還  慶応三年十二月九日 ／王政復古の 大号令

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる戯則伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き
1868.6.20	慶応四年五月一日		中田切川氾濫、田切上島・古田まで流失(飯島町)	1868洪水 -749					
1868.6.22 9.16	慶応四年戊辰五月三日 八月一日		慶応四年戊辰五月三日出水、八月一日大満水 辰満水と称す(川路資料)	1573洪水 -730					
1868.6.26	慶応四年五月七日					○移住した田原村新田の人々 「慶応四年(1868)五月七日から大沢川の押し出す大水と天竜川の増水が重なり、田原村新田の全戸に満水して家屋21戸・水田20町歩余が流失した。このとき、避難した人々のうち110戸が今でも裏師庵の裏山に住み、山組部落と称して石垣づくりの住宅を構えている。」	1868 辰満 水- D599	○洪水による集団 移住	明治元年一月三日／ 戊辰戦争 明治元年三月十四日 ／5ヵ条の誓文発布 明治元年九月八日／ 一世一元の制
1868.7.6	慶応四年五月十七日					○西向庵の十一面観音 「慶応四年五月十七日(辰満水)の時、西向庵のお堂が激流に吞まれる寸前、村人2、3人が身体の腰纏を大きな木の木こしばかりつけ決死の覚悟でぐらついている堂内に飛び込み、本尊の十一面観音と釣鐘を運びました。」	1868 辰満 水- D600	○決心覚悟で運び 出した本尊と釣鐘	
1868.8.19	慶応四年七月二日		天竜川大洪水(辰満水)						
1868	明治元年 (慶応四年)	前線				○夢枕に立つくらがり沢の大蛇 「澁心寺の黙仙和尚の夢枕に砂粒の人に化身したくらがり沢の大蛇が立ち、天に昇るために山から天竜川へ移動し千年住まなければならぬと言った。大蛇は、澁心寺や下の田畑村人には決して被害を与えないと誓い、沢をぐだつて通させてくれと一生の願いをして磨った。夢からさめた和尚は、くらがり沢の入り口に石を伏せ語聲を唱えて大蛇を封じ込めた。その1週間後、大蛇は荒れ狂って南沢へ抜け出したので、澁心寺は壁をぶち抜かれ、三百六十畳の畳の上には五尺から九尺の甘酒のような泥がなだれ込み、下に轢く田畑も大きな被害を受けた。」	1868 長雨・ 洪水- D503	○沢の主(大蛇)の 戒めによる土石流	明治元年一月三日／ 戊辰戦争 明治元年三月十四日 ／5ヵ条の誓文発布 明治元年九月八日／ 一世一元の制

西暦	和暦	誘因	被害の形態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き
1868	明治元年					<p>○喧嘩岩 「明治元年の山崩れ後、大岩のせいで上村川の流路が西へと移った。西側の地主が大岩を削って流れを東側に戻そうと主張したのに対し、東側の地主が絶対に割らないと氣勢を上げたため、長いこと論争になった。」 「上村小学校の下を南信濃村の赤沢までまっすぐに流れていた上村川の流路を、明治元年の山崩れ以後に上村小学校前で大きく西側に曲がるように変えた原因のひとつとされている。」</p>	1868-D517	○山崩れによる流路の変化がもたらした人々の争い	明治元年一月三日／戊辰戦争 明治元年三月十四日／5か条の誓文発布 明治元年九月八日／一世一元の制
1868.6	明治元年五月		三峰川氾濫、上殿島川除、村人足560人頂戴人足240人	1868洪水-761					
1868.7.7	明治元年五月十八日		五月十八日大満水。七月二日天竜川大洪水(辰の満水)						
1869.8.20	明治二年七月十三日		七月十三日大風雨あり、連年の洪水で天保以来の大凶作						
1869.12.1	明治二年十二月一日					<p>○入野谷騒動 「慶応二年(1866)から凶作が続き、明治元年(1868)の五月と八月におこった洪水(辰満水)により、天明・天保に次ぐ大凶作となった。また、明治新政により急激に経済の情勢が変動し、物価が高騰したため生活は困窮を極めた。木師郷の五カ村(市野瀬・中屋・浦・杉島・黒河内)においては、藩に対して用木の上納と年貢の上納をゆるめてほしいと嘆願したところ、聞き入れられなかった。とうとう明治二年(1869)十二月一日の夜、不満が一度に爆発し一揆が勃発した。その結果、藩は入野谷全体に対して上納の延期を認め、騒動は三日の夕方に治まった。」</p>	1869洪水-D529	○明治元年辰の満水がもたらした大凶作による一揆勃発	明治二年五月十三日／出版条例制定 明治二年六月十七日／版籍奉還

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き	
1870.10.2	明治三年九月八日		明治三年九月八日大洪水あり(川路資料)	1573洪水 -730					明治四年七月十四日 ／ 彦瀧置屋	
1875.7	明治8年7月		三峰川大洪水、青島より切込む狐島両新田を洗 う	1875洪水 -762						
1875.8.10	明治8年8月10日		明治8年8月10日大洪水(川路資料)	1573洪水 -730					明治8年4月14日／元 老院・大審院・地方官 議会の設置	
1880.1	明治13年10月	台風	明治13年10月暴風雨、大瀧水天童川氾濫、堤防 工費巨額に付租税減額数願(川路資料)	1573洪水 -730					明治13年／諏訪地域に おいて、製糸工場43工 場と飛躍的に増え、水 害と進えの問題が深刻 化する	
1882.9.29	明治15年9月29日	豪雨	明治15年9月29日夜より降雨、豪雨にて10月1日 大洪水(川路資料)	1573洪水 -730					明治15年1月4日／軍 人勅諭発布 明治15年7月23日／壬 午事変	
1884.2.21	明治17年2月21日					○開墾堤防 「松尾干振が伴野を洪水から護り良田に開 墾するため、開墾組を結成し、明治17年2 月21日に堤防工事を開始した。工事は天 童川の洪水に阻まれて至難を極めたが、 明治19年5月に一の勿起点から三百余間 の築堤完成した。しかしその年は長雨の 影響で天童川が氾濫し、堤防が決壊してし まった。その後諦めることなく、小西虎之助 の考案した木工沈床という工法を取入れて 工事を再開した。明治33年、一の勿起点か ら阿島境に至る石堤九百間が完成し、美田 三十七町歩を開いた。 ○開墾堤防の碑 「明治35年5月、16年に及びが堤防工事の苦 難と松尾干振の功績を讀み、一の勿起点 の堤防上に建立された。」	1884- D625	○水害に挑んだ人 の姿と功績	明治17年7月7日／華 族令制定 明治17年10月31日／ 秩父事件 明治17年12月4日／甲 申事変	
1885.6	明治18年6月		明治18年6月大洪水(川路資料)	1573洪水 -730						
		前線	南向村で洪水、渡場の田地流失(中川村)	1885洪水 -734						明治18年12月22日／ 内閣制度設置
		前線	片桐村で1週間の降雨で大洪水、小和田堤防決 壊(中川村)	1885洪水 -735						

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き
1885.6.19	明治18年6月19日		下平耕地天竜川西側の堤防に対し水流が直角に激突する形で堤防を崩し始め、その後連続降雨により堤防決壊、死者1名(駒ヶ根市)	1885洪水 -753					明治18年12月22日/ 内閣制度設置
1889.7.26	明治22年7月26日	台風	明治22年7月26日暴風雨にて洪水、9月11日(川路資料)	1573洪水 -730					明治22年2月21日/ 大日本帝国憲法公布
1890	明治23年		三峰川下新田へ切込む	1890洪水 -763					明治23年/オランダ人 技師デレーケを招き、 天竜川を含む五大河川 の調査を依頼
1891-1907	明治24年～明治40年	前線				○信能堤防 「毎年霖雨期に濁流が氾濫し利用されてい なかつた座光寺河原を良田に変えるため、 北原米太郎が私財を投じ二十年間の辛苦 を重ね、子弟とともに明治40年に完成させ た石塁堤」(飯田市座光寺ヶ原:「郷土のた から」pp.70-72.) ○北原米太郎の碑(信能堤防の築設者の 功績を讃える) 「霖雨水張り 竜躍り蛇奔る 堤を築き芥を 刈り 壑で良田と為す 大島の川 其涯源 有り 民其業に安んず 南風是水温に 功 を石にろくす 百世永く存し 黄稲に英晴す 種々蘊あるが如し 遠江 金原明善題額 従六位勲六等 平野信次郎書」	1891 洪水- D515	○災害に挑む人の 姿と功績を後代に 伝える	明治24年5月11日/ 大津事件 明治24年12月18日/ 足尾銅毒問題
1891.10.28	明治24年10月28日	濃尾地震	明治 震災輯録によると、西筑摩郡駒ヶ根村にて 大麓落ちて男一人壓死と記録が残っている(明 治震災輯録)石陣転倒、石垣崩壊	1891濃尾 地震-702	M8.0、内陸型地震で最大 級の地震、死者2,273人、 建物全半壊22万戸余、根 尾谷断層が動き一瞬にし て6mもの崖をつくりだした	○糞の河原での石済みに等しい 「北原米太郎が子弟とともに農耕の脚をさ いて石塁堤を築く様子をみて、人々が口に していた悲劇的なことば。」	1891 洪水- D553		

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き
1895	明治28年		八日市場の対岸かくずれ(庄右衛門ナギ)、八幡社が風圧で破壊されたことが棟札に記録あり、このとき土砂くずれタムができた、と記録があるが、詳細な日付等不明	1895-716					
1895.1.18	明治28年1月18日	地震	明治28年正月18日大地震(川路資料)	1586地震 -734					明治28年4月17日/日 清講和条約調印 明治28年4月23日/三 国干渉
1895.6.27	明治28年6月27日		明治28年6月27日洪水(川路資料)	1573洪水 -730					
1895.4.27	明治28年4月27日		阿島新町大火、40戸焼く	1895火事 -789					
1896.7.26	明治29年7月26日		明治29年7月26日大洪水(川路資料)	1573洪水 -730					明治29年6月15日/三 陸地方に大津波
1897.9.29	明治30年9月29日	豪雨	明治30年9月29日出水(川路資料)  片桐村で9月26から29日にかけて豪雨、大洪水となり中川原大堤防百間決壊。天竜川の本流が小和田の中央を流れる(中川村)	1573洪水 -730					明治30年12月9日/この 日までの全国における 赤痢病患者8万9427 人、死者2万2310人 に達する
1898.6	明治31年6月		六月上旬、下旬に大洪水、六斗川堤防切れる(諏訪地方)	1898洪水 -784					
1898.9	明治31年9月		九月上旬強雨、古来これなき大猛水となり八ヶ岳山嶮崩壊、木石土砂一時に押し出し諸川膨張(諏訪地方)	1898洪水 -790					明治31年6月30日/隈 板内閣成立
1898.9.6-7	明治31年旧7月21~22日	豪雨	21日夜半、上沢で山崩れ・崩壊・押し出し発生、小洪湯湯治宿/流失・埋没、死者10名	1898豪雨 -709					

西暦	和暦	誘因	被害の要態	被害地点 No.	災害の概要	まっわる級別伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き
1898.9.6-7	明治31年9月6日～7日		片桐村で大洪水あり、5月完成の中川原堤防全壊。小和田荒井修の家の庭まで水がついた(中川村)	1898洪水 -737					明治31年6月30日/隈板内閣成立
1898.9.25	明治31年9月25日		三峰川大洪水、境区より切込み、上下新田を一なめする。浸水45戸、 三峰川大洪水、榛原下より上殿島へ切込む、浸水68戸、堤防360間決壊	1898洪水 -764  1898洪水 -765					
1899-	明治32年～					○青島堤防 「天明年間(1781～1788年)に藩によって築かれた御見通し川除が青島耕地を守っていたが、明治元年(1868年)、明治15年(1882年)、明治18年(1885年)の大洪水により、青島耕地は大打撃を受けたため、関係地元民が集まり築堤計画や施工計画を立案した。さらにその費用も調達して果より許可を求め、地元民の責任により施工する方法をとった。橋爪吉太郎を中心とし、明治32年(1899年)に堤防が完成した。」 「大正12年(1923年)、橋爪与四郎、北原繁雄両氏が率先し、青島堤防保存会を結成し保存に努めた。美鷹村でも昭和26年(1951年)に美鷹村堤防保存会を組織し、水防資材保存庫を整備したり、常時堤防を見回り危険箇所の改善に努めた。」 ○北原繁雄氏が、三峰川の洪水復旧作業の工事の中で、伸縮式鉄線じゃこを発明した。 ○青島住民の水防技術の継承 「36災害の時、聖牛(うし)入れに関して、青島住民が自衛隊を指導した。」 ○耕地の深さ 「堤防の切れ目(霞堤)から大水の時は水がゆっくと逆流してくる。そのとき土が堆積して耕地が深くなった。」	1899- D518	○青島堤防の史実 ○水防技術の継承者	明治32年7月17日/日英通商航海条約発効 明治32年12月20日/門戸開放提議
1901.6.23	明治34年6月23日	豪雨	小川上平あだか、大沢、竹下がけ崩れ、家屋倒壊2戸、死者2名(喬木村)	1901土砂 -748					明治34年11月18日/八幡製鉄所開業式

西暦	和暦	誘因	被害の形態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き
1903.9	明治36年9月	前線	片桐村で連続雨天のため大洪水、31年の被害と同じ(中川村)	1903洪水 -738					明治36年/川路大石提議工(飯田市川路)
1905.4.29 5.5	明治38年4月29日 5月5日		明治38年乙己4月29日、5月5日大降霜あり(川路資料)	1573洪水 -730					明治38年8月10日/水ツマス講和委議 明治38年8月12日/第2回日英同盟協約調印 明治38年9月5日/日露講和条約調印 明治38年9月5日/日々谷焼打ち事件
1905.6	明治38年6月		天竜川大洪水						
1905.7.14 8.10	明治38年7月14日 8月10日	台風	明治38年乙己7月14日暴風雨、8月10日洪水(川路資料)	1573洪水 -730					
1907.8.24	明治40年8月24日		三峰川氾濫、榛原下堤防200間切込む、水田浸水29町歩(伊那市)	1907洪水 -766					明治40年7月24日/第3次日露協約 明治40年7月30日/第1回日露協約
1909.9.20	明治42年9月20日		三峰川洪水、榛原下堤防200間破壊、応急工事聖牛30組	1909洪水 -767					明治42年10月26日/伊藤博文、ハルビン駅前で暗殺される
1910頃	明治43年頃		市瀬仙吉氏の家に入砂が流入、飼馬が生き埋めで死亡	1910土砂 -734	小川の湯の前のナギ洞が崩壊				明治43年8月22日/韓国併合に関する日韓条約調印
1910.8.13	明治43年8月13日		明治43年庚戌8月13日洪水(此頃は天竜川筋が東寄りでありたため河普請少し)(川路資料)	1573洪水 -730					
1911	明治44年		大暴風雨で前沢川が氾濫、水防中に5人が溺死(飯島町)	1911洪水 -750					明治44年/王子製紙の遠山郷木材伐り出しが盛んに行われる
1911.4.11	明治44年4月11日		三峰川大洪水、榛原下堤防80間決壊、裏切120間	1911洪水 -770					

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地底 No.	エピソード・意義	社会の動き
1911.6.19	明治44年6月19日		大田切川大洪水、大田切橋上の高瀬堤防決壊、 田畑数十町歩が土砂に埋まる、浸水家屋100余 戸、北下平がほぼ全滅に近い惨状であった。 (駒ヶ根市下平)	1911洪水 -752					
1911.6.20	明治44年辛亥6月20日		明治44年辛亥6月20日大出水(川路資料)	1573洪水 -730					
1911.8	明治44年8月		片桐村で6月19日大暴風雨大洪水、小和田で 16ha浸水。田島郵便局裏で水防活動中の5名が 濁流に押し流され死亡(中川村)	1911洪水 -739					明治44年／王子製紙 の遠山郷木材伐り出し が盛んに行われる
1911.8	明治44年8月		8月に諏訪湖が大洪水、中筋方面浸水被害	1573洪水 -730					
1914.8.29	大正3年8月29日		大正3年8月29日大洪水(川路資料)	1914洪水 -759					大正3年8月23日／ドイ ツに宣戦布告、第1次世 界大戦に参戦
1923.6.7.	大正12年6月7日		杉島学校の校地が女崩、8月より阿弥陀堂へ約1 年間移転した(長谷村)	1923洪水 -740					
1923.6.9	大正12年6月9日	台風	洪水のため、四徳・桑原・北島に大被害。葛島県 管堤防破壊、3戸流出、田畑30ha流失(中川村)	1573洪水 -730					大正12年9月4日／亀 戸事件 大正12年9月16日／甘 粕事件
			6月9日、暴風(川路資料)	1923洪水 -785					
			6月9日天竜川大増水、飯田測候所開設以来の 最高雨量を記録。飯田町浸水、松川沿岸流失家 屋あり	1923土砂 -786					
			七久保字日向で山津波の惨状にあう						

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意識	社会の動き
1923.6.22	大正12年6月22日	台風	6月22日、暴風雨(川路資料) 前沢川で土石流、支流の日向沢川が切れ込み、上前沢集会所と住宅4戸流出、7戸を大破、中通では4戸に土砂が流入し女性1名・馬1頭が死亡、瀧戸では2戸の住宅と倉庫1棟を流出、前沢川橋流失、片桐村役場に土砂流入、新井では1戸流失、2戸が土砂に埋まり天竜川筋一帯は川原と化した(中川村)	1573洪水 -730					
1923.7.18	大正12年7月18日	豪雨	小和田の郷土沢・坊ヶ沢・洞ヶ沢が大洪水、家屋に土砂侵入、女・子どもは玉室寺に避難(中川村) 南田島の保谷沢川が大満水、所々堤防決壊で田畑30haを流出、正徳・明和に次ぐ被害 七久保村・片桐村大水害(飯島町) 三峰川天女橋水標6尺8寸(約2.1m)	1923洪水 -742 1923洪水 -743 1923洪水 -751 1923洪水 -771					大正12年9月4日/亀戸事件 大正12年9月16日/甘粕事件
1923.7.15	大正12年7月15日	豪雨	15日昼頃、山崩れによる河道埋塞で山の神沢で天然ダム形成。その後決壊。(飯島町)	1923豪雨 -703					
1923.9.1	大正12年9月1日	関東地震	白岩が白い煙を上げてくずれ落ちた(南信濃村)	1923関東地震-717	M7.9、伊豆大島、相模湾を震源として発生した直下型の大地震、死者・行方不明者10万5千余人、住家全壊10万9千余、住家半壊10万2千余、住家焼失21万2千余				
1927.6.13	昭和2年6月13日		農耕地約五十町歩が一面の海、空積堰堤が欠壊。(喬木村)	1927洪水 -792	直径2cmの降雹により小川川沿岸の農耕地約五十町歩が一面の海となる。田本平(小川)の人々が造った空積堰堤が欠壊し、約300m下流の小川川合流地点が落下した土砂により一時せき止められ、余勢をかって下流に災いした。	○伊久間水除土手(掘割) 「伊久間の人たちが集団で中世末期頃からつくりはじめたという。しかし災害が遠のくとその刃背を忘れがちになり、掘割を埋めたり物を置いたり、いざらいを怠った。その結果、大きな雹が降った昭和2年6月には、まちに水が溢れ出し、伊久間は災害に見舞われた。」	D508	○災害の教訓	昭和2年3月14日/金剛恐怖

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まっわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き
1928.9	昭和3年9月					<p>○九十九谷治山事業・塩沢砂防組合 「昭和3年9月(1928)、九十九谷の復旧を期して塩沢砂防組合が発足された。山腹工事が広い面積にわたって完工されていくに伴い付随しておこる雨水等への被害対処に苦心した。」</p> <p>○九十九谷生育の木材による大聖牛 「九十九谷の砂防事業により緑化した資源が、昭和25年の洪水時に九十九谷から流下する土砂のせき止めや道路保護のためについた大聖牛の材料となり効を奏した。」</p>	D507	○官民一体の治山事業	昭和3年3月9日／九十九谷の復旧を期して塩沢砂防組合が発足、官民一体の治山事業が始まる 昭和3年3月15日／3.15事件勃発 昭和3年5月3日／青南事件
1931	昭和6年		台風により瓢沓湖満水。ローリングダム問題大紛争に発展する。	1931洪水 -787					昭和6年3月3日／3月事件 昭和6年9月18日／満州事変 昭和6年10月8日／10月事件
1934.9.22	昭和9年9月22日	台風 (室戸台風)	昭和9年9月22日 大暴風雨被害甚大(川路資料)	1573洪水 -730	最大瞬間風速60m/sという強風により、4mを超える高潮が発生、死者2702人、不明334人、負傷者14,994人				
1938.4.27	昭和13年4月27日					<p>○山抜けで埋まった湯場 「昭和13年の曇ひとつない晴れた4月27日午前11時頃のこと、ものすごい大音響で烏帽子の北側の山裾が山抜けをした。そして午後1時頃、今度は南側の山麓が山抜けをした。この山抜けで地獄谷の、あなだつ(岩にあいた穴)を少し下ったところにある湯場が埋まってしまった。この湯場は、岩の間から硫黄の湯の花が噴き出ている腫物によく効くといわれており、ずっと昔は獣たちの治療場でもあった。」</p>	1938土砂-D542	○山抜けで埋まった湯場	昭和13年1月1日 新潟県十日町の映画館で、積雪のため屋根が落下、69人死 昭和13年4月1日／国民総動員法公布 昭和13年9月1日／関東地方、風速31メートルの台風。死者99人
1938.7.3-4	昭和13年7月3日～4日		北島堤防40m・177m決壊(中川村)	S13.7災-1					昭和14年9月3日／第2次世界大戦始まる
			中沢で死者2名、家屋被害48戸、新宮川沿岸の堤防破壊8,500m(駒ヶ根市)	S13.7災-2					

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地底 No.	エピソード・意識	社会の動き
1938.7.3-4	昭和13年7月3日～4日		下平で請井頭石堤300m決壊、道路延長4,000m・ 用水路100mが使用不能、流失家屋10戸、浸水 家屋30戸、土砂侵入15戸、下平丸塚の水田2町 歩を流失(駒ヶ根市)	S13.7災- 3					昭和13年1月1日 新潟 県十日町の映画館で、 積雪のため屋根が落 下、69人圧死 昭和13年4月1日／国 民総動員法公布 昭和13年9月1日／関 東地方、風速31メー ルの台風。死者99人 昭和14年9月3日／第2 次世界大戦始まる
			雨量146mm/日、西春近村大川除流失、殿島橋 橋脚東より5番目1.5m陥没、中殿島堤防392m破 壊、家屋2戸破壊	S13.7災- 4					
			上郷で堤防決壊30m	S13災-1					
			市田で蛇籠80m流失	S13災-2					
			神穂で堤防240m決壊	S13災-3					
1938.7.5	昭和13年7月5日	前線	河野村中芝地先で堤防250m決壊	S13災-4	県全体で死者・行方不明 者6名、家屋全半壊6戸、 田畑冠水・流失1272ha、 道路損壊595箇所。河 川、堤防、橋梁に大きな 被害があった。				
			生田村で堤防600m決壊	S13災-5					
			川路村が3～4尺の泥で埋まる	S13災-6					
			竜江村が3～4尺の泥で埋まる	S13災-7					
			新宮川汎氾(駒ヶ根市中沢・下平)	S13災-8					
1940.6.7	昭和15年6月7日		竜江で堤防130m決壊	S15災					
1940頃 1982年11月	昭和15年頃 昭和57年11月					○坂室の赤石とおこり石 「むかし、現在の坂室公園の下あたりの宮 川は急な崖になっていて、馬や人が川に落 ちたことから、赤石の難所と呼び恐れられ ていた。そのすぐ近くの左岸の土手には高 熱が出た時に触ると熱がさかたという、お こり石があった。赤石は、昭和15年ごろの 大水の後、引き上げられて坂室神社の境 内に運ばれた。おこり石は、昭和57年の台 風10号の大水で流されそうになったので、 その年の11月に同じく坂室神社の境内に 運ばれ、今に至っている。	1940 洪水- D607	○洪水によって移設 された地物	昭和15年9月27日／日 独伊3国同盟締結
1942	昭和17年		松尾で堤防決壊80m、耕地冠水16ha	S17災					昭和17年6月4日／ミッ ドウェー海戦

西暦	和暦	誘因	被害の象徴	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き
1945.9	昭和20年9月		天竜川大洪水、弁天堤防決壊	S20.9災					
			上久堅で水田流出100ha、流失家屋20戸、死者1名	S20災-1					
			黍島村門島地区で山崩れ、石山の鷹ノ巣神社に避難中の児童3人その家族7人が死亡、負傷者4名	S20災-2	10月1日サイパン島南東洋上に発生した台風9号は毎時40km内外で北上し、5日2時室戸岬200km付近に達し、6時頃より北東に転じ、速度を増して遠州沖台、房総南方を経て東方洋上に去った。中心気圧は740hpa程度で南方沖にそれたので風はやや弱く、太平洋岸でやや強かった。雨量は前日来の前線と相まって中部地方を中心に関東南部、東北南部に多かつた。豪雨が全流域に渡って続き、記録的な出水を生じた				昭和20年1月13日／三河地震 昭和20年6月15日／日本無条件降伏(敗戦)、降伏文書調印 昭和20年6月28日／進駐軍による占領
1945.10.5	昭和20年10月5日	台風 (台風9号)	時又で家屋浸水49戸	S20災-2					
			松尾で堤防決壊流失200m、耕地冠水流失80ha	S20災-3					
			飯田市弁天橋付近で法崩れが発生	S20災-4	飯田測候所における10月4日の最大雨量が、239mm総雨量500mm(飯田市上久堅の被害)死亡7名、全壊家屋2戸、耕地被害20町歩				
1947	昭和22年		松尾で堤防決壊流失90m、耕地冠水5ha	S22災					
1947.4.20	昭和22年4月20日		飯田市大火、焼損棟数3,742棟、焼損面積481,985平方メートル、焼損面積では戦後最大の市街地大火	S22.4災					昭和22年5月3日 日本国憲法施行
1947.9	昭和22年9月		小川川大洪水(橋木村)	S22.9災					

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地号 No.	エピソード・意義	社会の動き
1948.6.20	昭和23年6月20日	前線	竜江で無堤地100m流失	S23災-1	水稲305ha、麦類87haに被害。堤防、橋梁、道路の決壊が多く、家屋の被害も大きかった。				昭和23年1月26日／帝 鉄事件 昭和23年6月28日／福 井地震 昭和23年9月15日／ア イオン台風
			時又で家屋浸水10戸	S23災-2					
			市田で無堤地53m流失	S23災-3					
			美和ダム地点(ダムは昭和34年11月に完成)、最大洪水流量671m <sup>3</sup> /sec、洪水流量1311万m <sup>3</sup> /sec	S23災-4					
			大鹿村上蔵一釜沢間の道路2500m決壊流失、橋梁流失、通行不能	S23災-5					
			大鹿村下青木で堤防2ヶ所延長約800m流失、耕地敷地歩埋没	S23災-6					
1949.6.22	昭和24年6月22日	テラ台風	伊那市東春近で護岸決壊、浸水被害	S24災-1	死者1名、床上床下浸水6戸、田畑冠水78ha、堤防決壊、道路損壊等10ヶ所等の被害があった。				昭和24年7月5日／下 山事件 昭和24年8月31日／キ ティー台風
			伊那市伊那部、三峰川合流点で浸水被害	S24災-2					
			飯田市川路で浸水被害	S24災-3					
			飯田市竜江で浸水被害	S24災-4					
			川路村護岸工450m決壊	S25災-1					
			竜江で家屋浸水46戸、耕地冠水被害	S25災-2					
1950.6.9-14	昭和25年6月9～14日	前線	竜江で護岸工1200m、無堤地300m決壊、耕地冠水80ha	S25災-3	昭和25年9月1日／日本最初の民間ラジオ放送が開始される 昭和25年9月3日／ジューン台風 昭和25年9月8日／対日講和条約、日米安保条約調印				
			下久壁で無堤地200m決壊	S25災-4					
			6月大水害あり、小和田水田20ha冠水(中川村)	S25災-5					
			中沢で新宮川18mの水位観測、死亡者1名、建物流失1戸、建物破損10戸、床上・床下浸水33戸、堤防決壊11ヶ所、堰堤等作物被害2,260m(駒ヶ根市)	S25災-6					

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き			
1950.6.9-14	昭和25年6月9～14日	前線	山吹村堤防500m決壊、耕地流失10ha	S25災-5	6日6時南シナ海に発生した低気圧は、発達して熱帯低気圧となり、臺えながら東進し、9日に日本海中部で消滅した。しかしこの熱帯低気圧の付随した不連続線は、9日10時朝が、同日夕刻には再び北上し、その後やや南下し流域上空に横たわり12時には更に南下し本流域を遠ざかった。流域南部の山岳地帯に集中的な豪雨が	〇九十九谷治山事業・塩沢砂防組合 「昭和3年9月(1928)、九十九谷の覆旧を帰して塩沢砂防組合が発足された。山腹工事が広い面積にわたって完工されていくのに伴い付随しておこる雨水等への被害対処に苦心した。」 〇九十九谷生育の木材による大聖牛 「九十九谷の砂防事業により緑化した資源が、昭和25年の洪水時に九十九谷から流下する土砂のせき止めや道路保護のため」に作った大聖牛の材料となり効を奏した」	1928 洪水- D556	〇官民一体の治山 事業	昭和25年9月1日/日本最初の民間ラジオ放送が開始される 昭和25年9月3日/ジェーン台風 昭和25年9月8日/対日講和条約、日米安保条約調印			
			生田村福興堤防430m決壊、耕地流失8ha	S25災-6								
			生田村で根石10m流失	S25災-7								
			上郷村飯沼で堤防決壊75m、家屋浸水4戸、耕地浸水40ha	S25災-8								
			神福村で堤防250m流失、根固工50m決壊、家屋浸水15戸、田畑浸水40ha	S25災-9								
			松尾村清水で築堤工170m決壊、家屋浸水2戸、田畑浸水25ha	S25災-10								
			河野村八王子沖で根固20m流失	S25災-11								
			鼎村水手で床止工40m決壊、田畑浸水25ha	S25災-12								
			喬木村阿島堤防破堤、堤防流失400m、耕地流失30ha、浸水40ha	S25災-13								
			喬木村川川向で護岸工20m決壊、田畑浸水10ha	S25災-14								
			喬木村堂前で護岸工10m決壊、田畑浸水10ha	S25災-15								
			外原護岸堤防50m決壊、上垣外橋流失(中川村)	S26.7災						台風 (ケイト台風)	河野村一ノ羽で堤防20m決壊	S26災-2
			時又で床下浸水5戸	S26災-1								
			1951.7.3	昭和26年7月3日								

西暦	和暦	誘因	被害の事態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意識	社会の動き
1953.7.17	昭和28年7月17日	前線	飯田長姫町で山崩れ発生、死者1名 山吹集落で堤防100m流失、床下浸水72戸 座光寺集落で床下浸水72戸 上郷集落で床下浸水3戸 鼎集落で床下浸水32戸 松尾集落で根固流失40m、床下浸水3戸 竜丘集落で床上浸水1戸・床下浸水11戸、耕地冠水7ha 竜江集落で無堤地50m決壊、家屋半壊1戸、床下浸水2戸、耕地冠水 川路集落で床上浸水12戸・床下浸水39戸 市田集落で蛇籠60m流失 河野村大宮沖で堤防248m決壊 生田村宮沢川合流地点で堤防50m決壊 生田村間沢川合流地点で蛇籠護岸150m流失 大島集落で護岸400m流失 伊賀良集落で床下浸水28戸 清内路集落で家屋半壊1戸、床下浸水8戸 会地集落で床下浸水2戸 智里集落で家屋全壊1戸、半壊3戸、床下浸水5戸 浪合集落で家屋全壊1戸、半壊2戸、床上浸水6戸 根羽集落で家屋全壊2戸、半壊5戸、床上浸水1戸・床下浸水156戸、高橋地区で山崩れ発生 下條集落で家屋全壊1戸、半壊11戸、床上浸水16戸・床下浸水83戸	S28災-1 S28災-2 S28災-3 S28災-4 S28災-5 S28災-6 S28災-7 S28災-8 S28災-9 S28災-10 S28災-11 S28災-12 S28災-13 S28災-14 S28災-15 S28災-16 S28災-17 S28災-18 S28災-19 S28災-20 S28災-21	オホーツク海高気圧が優勢となったため梅雨も中休み状態にあったが、16日に著しい気圧の谷の東進に伴い低気圧が大陸から東進し日本海に入り梅雨前線は西日本から活発となった。前線は本州中部あるいは以南にあつて西日本を横断し揚子江方面に東西に伸びて停滞し、かつ南北に振動したため本流域何部には連日大雨が降り続き、21日夜半に至つてようやく小雨となった。今回の降雨はいわゆる梅雨末期の豪雨で本邦東方洋上に長らく停滞した高気圧に基つく異常に湿潤な南方温暖気流と日本海から現れて南下する冷気流との間に前線が形成され、これが両気流の消長及び地形が関連して南北に振動し、年降水量の20%に匹敵する豪雨となった。			昭和28年8月14日／吉田内閣不信任案可決 全国的凶作	

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まっわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き
1953.7.17	昭和28年7月17日	前線	富草集落で家屋全壊1戸、半壊2戸、床下浸水15戸	S28災-22	オホーツク海高気圧が優勢となったため梅雨も中休み状態にあったが、16日に著しい気圧の谷の東進に伴い低気圧が大陸から東進し日本海に入り梅雨前線は西日本から活発となった。前線は本州中部あるいは以南にあつて西日本を横断し揚子江方面に東西に伸びて停滞し、かつ南北に振動したため本流域何部には連日大雨が降り続き、21日夜半に至つてようやく小雨となった。今回の降雨はいわゆる梅雨末期の豪雨で本邦東洋上に亘らく停滞した高気圧に基つて異常に湿潤な南方温暖気流と日本海から現れて南下する冷気流との間に前線が形成され、これが高気流の消長及び地形が関連して南北に振動し、年降水量の20%に匹敵する豪雨となった。			昭和28年3月14日／吉田内閣不信任案可決 全国的凶作	
			大下條集落で家屋全壊3戸、半壊11戸、床下浸水1戸、中谷地区で山崩れ発生	S28災-23					
			神原集落で家屋半壊1戸、床下浸水1戸	S28災-24					
			平岡集落で床上浸水5戸・床下浸水1戸	S28災-25					
			千代集落で家屋半壊62戸	S28災-26					
			下久堅集落で家屋半壊1戸、床上浸水1戸・床下浸水1戸	S28災-27					
			上久堅集落で床下浸水34戸	S28災-28					
			神稲集落で家屋全壊2戸、半壊2戸	S28災-29					
			上村集落で家屋全壊1戸、半壊9戸、床上浸水54戸	S28災-30					
			木沢集落で家屋全壊9戸、半壊1戸、床上浸水4戸・床下浸水21戸	S28災-31					
			和田集落で家屋全壊1戸、半壊2戸、床下浸水31戸	S28災-32					
			平谷集落で家屋半壊9戸、床上浸水40戸・床下浸水51戸	S28災-33					
			7月19日、泰阜村ヤニマツ地籍で山崩れ、家屋の倒壊で1家3人の児童が死亡	S28災-34					
			山吹で堤防決壊90m、耕地流失5ha	S28.8災					
時又集落で高さ護岸2.5m、長さ8m決壊	S28.9災								
1953.8	昭和28年8月								
1953.9	昭和28年9月								
1955.1.20	昭和30年1月20日		飯田線門島～田本駅間の明島大表沢地籍の線路上に落石、最終電車の車面が傾斜地と天竜川川原に転落し乗客5人が死亡、重傷者6人	S30災					昭和30年8月6日／原水爆禁止第1回世界大会

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き
1957	昭和32年		四徳に洪水被害(中川村) 滝沢に洪水被害(中川村)	S32災-1 S32災-2					
1957.6.26-29	昭和32年6月26日～29日	豪雨 (台風5号)	村内の降雨量250mm・山間部300mm、村内全域で浸水、上清公民館裏の堤防決壊により数戸の建物が全壊・半壊・流失、孫六沢川が氾濫し上清川・蒸いの人家2戸流失、下清小黒川・梨野沢・とほ沢を始め村内各沢に山崩れが発生し蛇抜けとなつて道路や耕地に甚大な被害(清内路村)	S32.6災-1					昭和32年6月21日/日米共同声明で日米新時代を強調
1958.8.26	昭和33年8月26日	台風 (台風17号)	浪合村青木地籍で家屋2戸流失、宮本地籍で家屋倒壊・県道決壊 6月26日大水害、小川川・加々須川氾濫、流失家屋4戸、堤防決壊1,800m(喬木村)	S32.6災-2 S32.6災-3	(浪合村の被害) 行方不明者1名、家屋流失4戸、全壊4戸、半壊16戸 ○馬島先生顕徳碑 「昭和32年6月27日、豪雨災害の激甚奔走中に山腹の墜落に遭遇し殉死。村葬を挙げて顕徳碑を建て偉業を記る。」	1957 土砂 D-651	○災害救助中の殉難		
1958.9.18	昭和33年9月18日	台風	美和ダム地点ダムは昭和34年11月に完成、最大洪水流量570m <sup>3</sup> /sec、洪水流量1515万m <sup>3</sup> /sec	S33災	県内で死者17名、家屋全半壊159戸、床上床下浸水5353戸、河川1128ヶ所、道路等公共土木、治山、農業関係に大きな被害があった。			昭和33年3月9日/関門トンネル開通 昭和33年9月26日/狩野川台風	
1958.9	昭和33年9月	台風 (台風21号)	中川村で中川橋流失	S33.9災					

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地域 No.	エピソード・意義	社会の動き
1959.8.14	昭和34年8月14日	台風 (台風7)	美和ダム地点(ダムは昭和34年11月に完成)、最大洪水流量1182m <sup>3</sup> /sec、洪水流量3521万m <sup>3</sup> /sec	S34.8災	県内で死者・行方不明者71名、家屋全半壊4482戸、床上床下浸水15197戸、河川1746ヶ所等公共土木、農業関係に甚大な被害があった。 (長谷村の被害) 長谷村で全壊1戸、流失39戸、半壊1戸、床上・床下浸水30戸、堤防決壊1,180m、被害総額2億円				
			中沢の百々目木川兩岸の各所には延6kmにわたり各所に決壊箇所を生じ、耕地の流失7区5畝(駒ヶ根市)	S34.8災-2	伊那里杉島、柏木集落孤立、美和小学校戸大分校半壊半流失、被害総額2億円				昭和34年4月10日／皇太子(=現天皇)結婚
			富士県立沢のセンガ沢で土石流発生、死亡19名、重症2名、家屋流失8戸	S34.8災-3	(茅野市の被害) 茅野市で死者2名、流失家屋22戸、半壊家屋36戸、床上浸水家屋93戸、流失・埋没耕地149.53ha、堤防決壊50ヶ所、延焼5,840m、流失橋梁35ヶ所、上川水系の橋ほとんど流失、被害総額10億7千万円				

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる録則伝承	伝承 地号 No.	エピソード・意義	社会の動き
1959.9.26	昭和34年9月26日	台風 (伊勢湾台風)			<p>長野県下で死者不明12名、家屋浸水2000戸、被害総額60億円 (阿南町の被害) 死者4名、全壊134戸、流失1戸、半壊390戸 (洩合村の被害) 全壊12戸、半壊53戸、床上・床下浸水22戸 (森島村の被害) 全壊102戸、半壊208戸、罹災者数1531名 (喬木村の被害) 全壊家屋10戸、半壊家屋52戸、被害額496万円 (駒ヶ根市の被害) 建物被害21戸、中沢下井水路決壊10m、山崩れ2ヶ所 (長谷村の被害) 全壊5戸、半壊18戸、水田畑流埋没1.8町歩、被害総額2,000万円 (茅野市の被害) 東・豊平・泉野・北山などの山浦地域で大きな被害、死者1名、家屋全壊44戸、半壊1,317戸、水稲倒伏138ha、被害総額3億5千万円に及んだ (飯田市の被害) 上久堅で全壊家屋51戸、半壊家屋174戸 (清内路村の被害) 上清部落で全壊13戸、半壊54戸、一部破壊100戸以上、甚大な植林地の倒木被害</p>				昭和34年4月10日／皇太子(現天皇)結婚

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・遺業	社会の動き			
1961.6.26-29	昭和36年6月26～29日	前線	諏訪湖釜口水門から氾濫、市街地2/3以上が29日から4日湛水、国道・国鉄一時不通	S36災-1	梅雨前線が熱帯低気圧の影響を受け活発となり、伊那谷全域に記録的な雨量をもたらした。特に小渋川流域及び飯田付近が多かった。集中豪雨により天竜川水系各所で決壊、飯田・下伊那における被害総額150億円	三十六災最高水位標(石碑)	D722		昭和36年8月8日／松川事件無罪判決 昭和36年9月16日／新2室戸台風			
			飯田市川路で堤防欠損750m、家屋全壊83戸、半壊45戸、床上浸水49戸、床下浸水48戸、田畑56ha、宅地7ha等の被害	S36災-2	本支流あわせて死者行方不明220名、床上浸水1591戸、床下浸水1158戸等の被害であった。			三六災最高水位標(飯田市川路駅前の標柱) 「白くにごった水が屋根までつき、助けてと書いた旗を立てホートの救助を待ちました。人々は首まで水に漬かりながら命からがら逃げました。川路駅前の交差点には、三六災のとき地上から3～4mの所まで水が来たことを示す標柱が立てられている。」				
			飯田市竜江で破堤95m、家屋全壊11戸、床上浸水21戸、田畑35ha等の被害	S36災-3	死者9名、行方不明者2名、流失家屋42戸、全壊半壊家屋66戸、床下浸水557戸。							
			飯田市下久堅知久平で家屋半壊1戸、床上浸水4戸、床下浸水2戸、田畑6ha、宅地1ha等の被害	S36災-4	(飯田市内久堅の被害) 全壊家屋5戸、半壊家屋8戸、床上浸水3戸、床下浸水32戸							
			飯田市松尾で堤防破堤480m、家屋全壊2戸、半壊4戸、床上浸水6戸、床下浸水2戸、田畑7ha、宅地2ha等の被害	S36災-5	(中川村の被害) 死者・行方不明者18名、被害総額12億6251万3000円							
			飯田市松尾水神で堤防破堤50m、欠損570m、家屋半壊2戸、床上浸水7戸、床下浸水2戸、田畑26ha、宅地16ha等の被害	S36災-6	(清内路村の被害) 被害総額1億8千6百30万1千円、全半壊33戸、床上浸水142戸							
			飯田市松尾清水で堤防欠損315m、家屋全壊14戸、半壊28戸、床上浸水46戸、床下浸水74戸、田畑64ha、宅地24ha等の被害	S36災-7	(森島村の被害) 家屋全壊1戸、流失5戸、半壊9戸、浸水15戸							
			飯田市座光寺で堤防欠損計900m、座光寺及び高森町下市田・市田で家屋全壊11戸、半壊5戸、床上20戸、床下浸水505戸、田畑134ha、宅地81ha等の被害	S36災-8	(香木村の被害) 全壊家屋14戸、半壊家屋17戸、床上・床下浸水367戸							
			飯田市内郷南条で田畑5ha等の被害	S36災-9	(駒ヶ根市の被害) 死亡者5名、総額21億円、全壊家屋34戸、流失家屋31戸、半壊家屋35戸、浸水家屋199個、山地崩壊419カ所167ha							
			香木村香木で堤防欠損230m、香木村香木及び下豊丘村伴野で家屋全壊22戸、半壊3戸、床上浸水7戸、床下浸水110戸、田畑66ha、宅地6.3ha等の被害	S36災-10	(茅野市の被害) 麓岸決壊5.317m、耕地の流失9.7ha、被害総額3億2千300万円							
			香木村馬場平で田畑6ha等の被害	S36災-12								

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・遺業	社会の動き
1961.6.26-29	昭和36年6月26～29日	前線	豊丘村伴野で堤防破壊570m	S36災-13	の影響を受け活発となり、伊那谷全域に記録的な雨量をもたらした。特に小浜川流域及び飯田付近が多かった。 集中豪雨により天竜川水系各所で決壊、飯田・下伊那における被害総額150億円 本支流あわせて死者行方不明220名、床上浸水1391戸、床下浸水1158戸等の被害であった。 (高森町の被害) 死者9名、行方不明者2名、流失家屋42戸、全壊半壊家屋66戸、床下上浸水557戸。 (飯田市上久堅の被害) 全壊家屋3戸、半壊家屋8戸、床上浸水3戸、床下浸水32戸 (中川村の被害) 死者・行方不明者18名、被害総額12億6251万3000円 (清内路村の被害) 被害総額1億8千6百30万1千円、全半壊33戸、床上浸水142戸 (養島村の被害) 家屋全壊1戸、流失5戸、半壊9戸、浸水15戸 (喬木村の被害) 全壊家屋14戸、半壊家屋17戸、床上・床下浸水367戸 (駒ヶ根市の被害) 死亡者5名、総額21億円、全壊家屋34戸、流失家屋31戸、半壊家屋35戸、浸水家屋19戸、山地崩壊419カ所167ha (茅野市の被害) 流失5.7ha、被害総額3億2千300万円				昭和36年8月8日／松川事件無罪判決 昭和36年9月16日／第2室戸台風
			高森町下市田で堤防破壊685m	S36災-15	高森町下市田で堤防破壊685m				
			高森町吉田で堤防破壊計300m、欠損146m、田畑5ha等の被害	S36災-16	高森町吉田で堤防破壊計300m、欠損146m、田畑5ha等の被害				

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・遺業	社会の動き				
1961.6.26-29	昭和36年6月26～29日	前線	田沢川で約60m高さの鉄砲水、追分に山津波襲来し家屋流出・行方不明者多数・追分橋流出	S36災-44	梅雨前線が執帯低気圧の影響を受け活発となり、伊那谷全域に記録的な雨量をもたらした。特に小笠川流域及び飯田付近が多かった。	○恐怖の思い出、死とたたかった一夜(竹内貴代子) 「高森町未曾有の災害となった田沢川追分の土石流で濁流にのまれながらも丸死に一生を得た時の様子が語られている。」	S36土砂-D652	○土砂災害の恐怖	昭和36年8月8日／松川事件無罪判決 昭和36年9月16日／第2室戸台風				
			高森町山吹で堤防破壊430m、欠損350m、田畑35ha等の被害	S36災-17	高森町山吹で堤防破壊430m、欠損350m、田畑35ha等の被害	S36災-17	高森町山吹で堤防破壊430m、欠損350m、田畑35ha等の被害						
			松川町大島で堤防欠損計1020m、家屋全壊3戸、田畑8ha、宅地0.4ha等の被害	S36災-18	松川町大島で堤防欠損計1020m、家屋全壊3戸、田畑8ha、宅地0.4ha等の被害	S36災-18	松川町大島で堤防欠損計1020m、家屋全壊3戸、田畑8ha、宅地0.4ha等の被害						
			中川村葛島堤防欠損50m、床上浸水14戸、田畑29ha、宅地2ha等の被害	S36災-19	中川村葛島堤防欠損50m、床上浸水14戸、田畑29ha、宅地2ha等の被害	S36災-19	中川村葛島堤防欠損50m、床上浸水14戸、田畑29ha、宅地2ha等の被害						
			中川村南田島で堤防破壊560m、欠損150m、田畑4ha等の被害	S36災-20	中川村南田島で堤防破壊560m、欠損150m、田畑4ha等の被害	S36災-20	中川村南田島で堤防破壊560m、欠損150m、田畑4ha等の被害						
			中川村中村で堤防破壊315m、欠損80m、田畑7ha等の被害	S36災-21	中川村中村で堤防破壊315m、欠損80m、田畑7ha等の被害	S36災-21	中川村中村で堤防破壊315m、欠損80m、田畑7ha等の被害						
			中川村小和田で堤防破壊300m、欠損400m、田畑29ha等の被害	S36災-22	中川村小和田で堤防破壊300m、欠損400m、田畑29ha等の被害	S36災-22	中川村小和田で堤防破壊300m、欠損400m、田畑29ha等の被害						
			飯島町鳥居原で床下浸水2戸、田畑11ha、宅地0.3ha等の被害	S36災-23	飯島町鳥居原で床下浸水2戸、田畑11ha、宅地0.3ha等の被害	S36災-23	飯島町鳥居原で床下浸水2戸、田畑11ha、宅地0.3ha等の被害						
			飯島町日曾利で田畑15ha等の被害	S36災-24	飯島町日曾利で田畑15ha等の被害	S36災-24	飯島町日曾利で田畑15ha等の被害						
			大鹿村大河原の大西山崩落、死者39名	S36災-25	大鹿村大河原の大西山崩落、死者39名	S36災-25	大鹿村大河原の大西山崩落、死者39名						
			小笠川砂防出張所が破壊・職員6名が殉職	S36災-26	小笠川砂防出張所が破壊・職員6名が殉職	S36災-26	小笠川砂防出張所が破壊・職員6名が殉職						
			駒ヶ根市中沢で堤防破壊160m、欠損170m、田畑4ha等の被害	S36災-27	駒ヶ根市中沢で堤防破壊160m、欠損170m、田畑4ha等の被害	S36災-27	駒ヶ根市中沢で堤防破壊160m、欠損170m、田畑4ha等の被害						
			駒ヶ根市小鍛冶で田畑12ha等の被害	S36災-28	駒ヶ根市小鍛冶で田畑12ha等の被害	S36災-28	駒ヶ根市小鍛冶で田畑12ha等の被害						
			宮田村中越で堤防欠損60m、田畑4ha等の被害	S36災-29	宮田村中越で堤防欠損60m、田畑4ha等の被害	S36災-29	宮田村中越で堤防欠損60m、田畑4ha等の被害						
			宮田村大久保で田畑7ha等の被害	S36災-30	宮田村大久保で田畑7ha等の被害	S36災-30	宮田村大久保で田畑7ha等の被害						
			伊那市美篤上大島地籍の三峰川で堤防が大きく決壊	S36災-31	伊那市美篤上大島地籍の三峰川で堤防が大きく決壊	S36災-31	伊那市美篤上大島地籍の三峰川で堤防が大きく決壊						
			伊那市東春近田原で田畑8ha等の被害	S36災-32	伊那市東春近田原で田畑8ha等の被害	S36災-32	伊那市東春近田原で田畑8ha等の被害						

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まっわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き						
1961.6.26-29	昭和36年6月26～29日	前線	伊那市西春近表木で田畑6ha等の被害	S36災-33	梅雨前線が熱帯低気圧の影響を受け活発となり、伊那谷全域に記録的な雨量をもたらした。特に小渋川流域及び飯田付近が多かった。				昭和36年8月8日／松川事件無罪判決 昭和36年9月16日／第2室戸台風						
			伊那市西春近沢渡で田畑3ha等の被害	S36災-34	集中豪雨により天竜川水系各所で決壊、飯田・下伊那における被害総額150億円										
			伊那市上新田で床上浸水3戸、田畑5ha等の被害	S36災-35	本支流あわせて死者1591戸、床上浸水1158戸										
			佐久間町大輪右岸で地すべり発生	S36災-36	等の被害であった。(高森町の被害)										
			飯田市伊賀良地区で土石流発生、死亡者5名、45戸流失	S36災-37	死者9名、行方不明者2名、流失家屋42戸、全壊半壊家屋66戸、床上浸水557戸。										
			飯田城東・西郷地区で野底川が氾濫、上流で土石流発生、死亡者7名	S36災-38	(飯田市上久堅の被害)全壊家屋3戸、半壊家屋8戸、床上浸水3戸、床上浸水32戸										
			中川村四徳で土石流発生、死亡者7名、被災戸数61戸、廃村	S36災-39	(中川村の被害)死者・行方不明者18名、被害総額12億6251万3000円										
			松川町生田で土石流発生	S36災-40	(清内路村の被害)被害総額1億8千6百30万円										
			27日水島山に山崩れ発生、ヨキトギ沢・マセノ沢・孫六沢を始め次々と各所に崩落・山津波続発、中平部落)黒川橋流失(清内路村)	S36災-41	1千円、全半壊33戸、床上浸水142戸										
			泰阜村で明治初年に金原明善によって築堤されたという明島の島地籍天竜川堤防300mが決壊流失。	S36災-42	(泰阜村の被害)家屋全壊1戸、流失5戸、半壊9戸、浸水15戸										
			長谷村杉島岩入地籍へ通する仮橋流失、浦線もいたるところで崩壊	S36災-43	(橋木村の被害)全壊家屋14戸、半壊家屋17戸、床上・床上浸水367戸										
			長谷村奥浦地籍で地すべり発生	S36災-44	(駒ヶ根市の被害)死亡者5名、総額21億円、全壊家屋34戸、流失家屋31戸、半壊家屋35戸、浸水家屋19個、山地崩壊419カ所167ha										
												(茅野市の被害)護岸決壊5,317m、耕地の流失9.7ha、被害総額3億2千300万円			

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・遺業	社会の動き		
1961.6.26-29	昭和36年6月26～29日	前線			梅雨前線が熱帯低気圧の影響を受け活発となり、伊那谷全域に記録的な雨量をもたらした。特に小笠川流域及び飯田付近が多かった。 集中豪雨により天竜川水系各所で決壊、飯田・下伊那における被害総額150億円 本支流あわせて死者行方不明220名、床上浸水1591戸、床下浸水1158戸等の被害であった。 (高森町の被害) 死者9名、行方不明者2名、流失家屋42戸、全壊半壊家屋66戸、床上上浸水557戸。 (飯田市上久堅の被害) 全壊家屋3戸、半壊家屋8戸、床上浸水3戸、床下浸水32戸 (中川村の被害) 死者・行方不明者18名、被害総額12億6251万3000円 (清内路村の被害) 被害総額1億8千6百30万1千円、全半壊33戸、床上浸水142戸 (秦阜村の被害) 家屋全壊1戸、流失5戸、半壊9戸、浸水15戸 (喬木村の被害) 全壊家屋14戸、半壊家屋17戸、床上・床下浸水367戸 (駒ヶ根市の被害) 死亡者5名、総額21億円、全壊家屋34戸、流失家屋31戸、半壊家屋35戸、浸水家屋191ha、山地崩壊419か所167ha (茅野市の被害) 護岸決壊5,317m、耕地の流失9.7ha、被害総額3億2千300万円		○松尾幸久氏の36災害体験談 「27日、鹿塩地区で4軒流出。小さい村道の橋に木の根や土石流が詰まり、水が方々に流れ出てしまうのに対処するために外にいた3名が死亡。鹿塩川の水が橋を越す。午後には電話・電気が使えなくなる。語り部は山手の実家が避難し何もできなかつた。」 「28日、朝から手当たり次第に生活必需品を買い集める。午後から降り出した雨により川が決壊、地響きとともに流木や1～2mもの大石が川の上を舞うように流れていった。村の決死隊が救助を求めて山越えを開始。5～6日後に自衛隊のヘリコプターが来た。」 「29日、雨が止み曇り空の中、大西山が崩れ落ち、落ちた土が全部つぶれ人も家畜も感えた。ええに流された」 (教訓) ○災害時の広域的な協力体制 ○災害を起こさない、災害から逃れる工夫と努力を怠らない ○自然の法則と生活の知恵を大切に自然を無視した開発をしない	S36災-D510			昭和36年8月8日／松川事件無罪判決 昭和36年9月16日／第2室戸台風
						○丑満水記念碑 「36災害後、宮の上堤の土手に建てられた」	S36災-D513	○灌漑用水にまつわる利権争い(東野と上郷村)			
						○千立き石(夜泣き石) 「正徳五年の未満水の時に、野底川から運ばれたものと伝えられている。」 ○千早振る神代も聞かず野底山天王原に水上がるとは(昭和36年当時歌われていた)	S36災-D514	○伝説			

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き
1964.9.25	昭和39年9月25日	台風20号	太田切川の堤防決壊、赤穂上水道北原浄水場機能停止(駒ヶ根市)	S39災					昭和39年10月10日/ 東京オリンピック開催
1965.9.15-18	昭和40年9月15~18日	台風 (台風24号)	佐久間町浦川で氾濫、浸水家屋多数	S40災	台風24号は渥美半島に上陸し、中部山岳部で二つに分裂し勢力を押し、群馬県を通り日本海沿いに北上した。天竜川流域は台風24号が南アルプスを通過することにより各流域に強い雨が降った。				昭和40年6月22日/日 韓基本条約成立 昭和40年8月3日/松 代群発地震
1967.6.13	昭和42年6月13日	渇水	天竜川宮ヶ瀬で最低流量22.8 <sup>l</sup> m <sup>3</sup> /secを観測	S42.6災					
1967.7.10	昭和42年7月10日	低気圧 前線	秦阜ダム上流天竜峡で洪水被害発生、床上浸水385戸・床下浸水583戸	S42.7災	日本本土を縦断している梅雨前線は台風崩れの熱帯低気圧と台風8号の影響で活発となり雷を伴い雨を降らせた。天竜川流域は御岳とハケ岳を結ぶ嶺に前線が停滞したため前線の前後は多かつた。床上浸水385戸、床下浸水583戸であった。				昭和42年4月15日/美 濃都東京都知事当選 昭和42年8月28日/新 潟・山形に集中豪雨 昭和42年10月8日/羽 田学生子午
1968.8.25-30	昭和43年8月25~30日	台風 (台風10号)	諏訪市内の民家2戸が土砂崩れのため倒壊、2世帯7人家の下敷となり3人死亡、4人が重軽、諏訪湖があふれ諏訪市内を中心に床上・床下浸水1000戸をたす	S42.7災- 2	県内で死者・行方不明者7名、家屋全半壊、一部破損102戸、床上・床下浸水1590戸。農業・林業・公共土木施設に被害甚大であった。 (阿南町の被害) 新野地区260mm・大下袋地区200.5mmの日降雨量観測、全壊134戸、半壊390戸				昭和43年8月8日/日 本初の心臓移植 昭和43年12月10日/ 三億円事件 川端康成にノーベル賞

西暦	和暦	誘因	被害の形態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き
1968.8.25-30	昭和43年8月25～30日	台風 (台風10号)	佐久間町大輪のつり橋大輪橋流失	S43災-4	県内で死者・行方不明者7名、家屋全半壊・一部破損102戸、床上床下浸水1590戸。農業・林業・公共土木施設に被害甚大であった。 (阿南町の被害) 新野地区260mm、大下条地区200.5mmの日降雨量観測、全壊134戸、半壊390戸				昭和43年8月8日／日 本初の心臓移植 昭和43年12月10日／ 三徳円事件 川端康成にノーベル賞
			佐久間町浦川で国鉄飯田線大干瀬鉄橋流失	S43災-5					
			秦阜村南部地区で時間雨量80mm以上を観測、小河川の氾濫や山崩れが生じ被害総額2億3百31万5千円。田本福寿院下に地すべり発生	S43災-6					
			伊那市富県桜井で堤防破壊250m	S45災-1					
			宮田村大久保で堤防欠壊56m、床上浸水1戸、床下浸水23戸、田畑17ha等の被害	S45災-2					
			飯島町中平で堤防欠壊200m、床上浸水1戸、床下浸水22戸、田13ha等の被害	S45災-3					
			駒ヶ根市大久保で堤防欠壊241m、床下浸水14戸、田16ha等の被害	S45災-4					
			中川村南向飯沼で床下浸水1戸	S45災-5					
中川村大草付近で法崩れ	S45災-6								
豊丘村柿開土で堤防破壊150m	S45災-7								
川路集落2000t堤防越流、床上浸水2戸、床下浸水1戸、川路菜園(約60ha)が水没	S45災-8								
1972.2.24	昭和47年2月24日		阿島町大火	S47.2災					昭和47年2月3日／札幌 冬季オリンピック 昭和47年2月19日／連 合赤軍浅間山荘事件 昭和47年5月15日／沖 縄返還 昭和47年9月25日／日 中国交正常化
1972.7	昭和47年7月	低気圧 前線	飯島町与田切橋流出	S47災					
1972.7.10	昭和47年7月10日	前線	諏訪市普門寺では赤津川が氾濫、鉄砲水となり4名死亡、4名重軽傷	S47.7災					

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き
1974.7.4	昭和49年7月4日	豪雨 (台風5号)	米沢地籍に造成中の吉田ゴルフ場の土砂が大 量に流失	S49災	(茅野市の被害) 堤防決壊440m、被害総 額4億8千万円				昭和49年11月26日/ 田中首相、金融問題で 辞任
1980.7.8	昭和55年7月8日		岡谷市堀の内で床上浸水4戸	S55災-1					昭和55年8月8日/「金 大中氏を殺させるな！」 国民大会開催
			諏訪市末広町・四賀などで床上浸水123戸	S55災-2					
			茅野市宮川の住宅裏側で石が崩れ、住宅が埋ま る	S55災-3					
			県道諏訪一茅野線が諏訪市普門寺入口で土砂 崩れ	S55災-4					
1982.8.1-2	昭和57年8月1日～2日	台風 (10号台風)	天竜川増水により小和田の水田10haをはじめ渡 場下川原1ha・飯沼0.3haの水田が冠水(中川村)	S57災-1					昭和57年8月25日/閣 議で行財政改革大綱を 決定
			小黒川及び黒川が氾濫、村営保養センター―仙流 荘半壊、付近一帯が河原と化した(伊那市長谷)	S57災-2					
1983.5.15-17	昭和58年5月15日～17日		三林で土砂崩落(中川村七久保)	S58.5災					昭和58年5月26日/日 本海中部地震 昭和58年10月3日/三 宅島大噴火 昭和58年10月12日/ 田中元首相に美刑判決

西暦	和暦	誘因	被害の受態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き		
1953.9.26-30	昭和58年9月26～30日	前線・台風 (台風10号)	茅野市米沢の榎沢川で氾濫、床上浸水3戸、床下浸水44戸	S58災-1	台風の東進に伴って前線活動は更に活発になり、長野圏内でも27日朝から雨となった。この雨は1時間5mm程度の並雨で続いたが、台風が九州に接近するにつれて雨足が次第に強まり、夜半過ぎ南部では所により1時間に10mmを越すようになった。台風は九州上陸後更に弱まりながら速度を速めて進み、九州中部を横断して28日15時高知県宿毛市付近で熱帯低気圧となった。この頃から県内の雨は中・南部を中心に一段と強まって、1時間に10mm以上の強い雨となり、総雨量は県南部や西部で200mm以上、多い所は400mmに達した。床上浸水2700戸、床下浸水3900戸等の被害があった。(中川村の被害) 罹災世帯59戸				昭和58年5月26日／日本海中部地震 昭和58年10月3日／三宅島大噴火 昭和58年10月12日／田中元首相に美刑判決		
			茅野市西茅野の浦沢川で護岸決壊、床上浸水2戸、床下浸水24戸	S58災-2							
			茅野市城山で山崩れ発生、家屋全壊1戸、床上1戸	S58災-3							
			下諏訪町で諏訪湖の水位上昇による床上浸水15戸、床下浸水57戸	S58災-4							
			諏訪市で諏訪湖の水位上昇による床上浸水948戸、床下浸水901戸、農地浸水223ha	S58災-5							
			諏訪市双葉ヶ丘の唐沢川で土石流、家屋全壊2戸、半壊4戸、床上浸水9戸、床下浸水22戸	S58災-6							
			諏訪市元町の榎沢川で山崩れ、死者あり、家屋全壊2戸、床上1戸	S58災-7							
			諏訪市四賀神戸、中門川で諏訪湖の水位上昇による床上浸水154戸、床下浸水152戸、農地浸水31ha	S58災-8							
			諏訪市島崎川で諏訪湖の水位上昇による床上浸水108戸、床下浸水197戸、農地浸水86.5ha	S58災-9							
			諏訪市宮川で諏訪湖の水位上昇による床上浸水46戸、床下浸水302戸、農地浸水215.4ha	S58災-10							
			岡谷市で諏訪湖の水位上昇による床上浸水13戸、床下浸水208戸	S58災-11							
			岡谷市橋原、天竜川で諏訪湖の水位上昇による床上浸水6戸、床下浸水131戸	S58災-12							
			辰野町下辰野元町地区、側溝が川に遮られ溢水、床下浸水9戸	S58災-13							

西暦	和暦	誘因	被害の要態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き		
1983.9.26-30	昭和58年9月26～30日	前線・台風 (台風10号)	伊那市下殿島で護岸破堤、床下浸水11戸	S58災-14	台風の東進に伴って前線活動は更に活発になり、長野県内でも27日朝から雨となった。この雨は1時間5mm程度の並雨で続いたが、台風が九州に接近するにつれて雨足が次第に強まり、夜半過ぎ南部では所により1時間に10mmを越すようになった。台風は九州上陸後更に弱まりながら速度を速めて進み、九州中部を横断して28日15時高知県宿毛市付近で熱帯低気圧となった。この頃から県内の雨は中・南部を中心に10mm以上の強い雨となり、総雨量は県南部や西部で200mm以上、多い所は400mmに達した。床上浸水2700戸、床下浸水3900戸等の被害があった。(中川村の被害) 罹災世帯59戸 (阿南町の被害) 全壊1戸、半壊2戸、一部損壊2戸、床下・床上浸水52戸、道路被害208箇所、河川被害158箇所						
			伊那市北林で河川氾濫、床下浸水9戸	S58災-15							
			高遠町下町で藤沢川堤防決壊、家屋全壊2戸、床上浸水13戸、床下浸水26戸	S58災-16							
			長谷村山吹沢で山崩れ発生、床上浸水1戸、床下浸水1戸	S58災-17							
			駒ヶ根市北割1区の大田切川、床上浸水1戸、床下浸水8戸	S58災-18							
			駒ヶ根市福岡地区で床下浸水14戸	S58災-19							
			駒ヶ根市市場割地区で床下浸水9戸	S58災-20							
			駒ヶ根市吉瀬地区で護岸決壊、家屋半壊1戸、床上浸水2戸、床下浸水6戸	S58災-21							
			駒ヶ根市大倉倉地区で溢水、家屋全壊1戸、半壊2戸、床上浸水3戸	S58災-22							
			飯島町飯島梅戸神社の唐沢川増水、床上浸水1戸、床下浸水34戸	S58災-23							
			飯島町本郷の十王堂沢川で護岸破堤、床上浸水6戸、床下浸水11戸	S58災-24							
			飯島町七久保高遠原の宮の沢川で山崩れによる土砂流入、床上5戸、床下16戸	S58災-25							
			飯島町七久保新田の大井川で床下浸水57戸	S58災-26							
			中川村片桐で3.8ha、1戸の浸水被害が発生	S58災-27							
			中川村片桐の牧ヶ原橋付近で、18.5ha、4戸の浸水被害が発生	S58災-28							
			中川村大草で14戸の浸水被害が発生	S58災-29							
			中川村飯沼で堤防が600mにわたって決壊、水田8ha流失、小和田で6ha・渡場で1ha流失	S59災-48							

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意識	社会の動き	
1983.9.26-30	昭和58年9月26～30日	前線・台風 (台風10号)	中川村前沢川上流で土石流、増水して決壊	S59災-49	台風の東進に伴って前線活動は更に活発になり、長野県内でも27日朝から雨となった。この雨は1時間5mm程度の並雨で続いたが、台風が九州に接近するにつれて雨足が次第に強まり、夜半過ぎ南部では所により1時間に10mmを越すようになった。台風は九州上陸後更に弱まりながら速度を速めて進み、九州中部を横断して28日15時高知県宿毛市付近で熱帯低気圧となった。この頃から県内の雨は中・南部を中心に10mm以上の強い雨となり、総雨量は県南部や西部で200mm以上、多い所は400mmに達した。床上浸水2700戸、床下浸水3900戸等の被害があった。(中川村の被害)罹災世帯59戸(阿南町の被害)全壊1戸、半壊2戸、一部損壊2戸、床下・床上浸水52戸、道路被害208箇所、河川被害158箇所					昭和58年5月26日／日本海中部地震 昭和58年10月3日／三宅島大噴火 昭和58年10月12日／田中元首相に美刑判決
			天竜川と小渋川の合流点で20戸の浸水被害が発生	S58災-30						
			松川町城北の城北川で河川氾濫、床上浸水1戸、床下浸水5戸	S58災-31						
			松川町大島桑園地区で山崩れ発生、家屋全壊1戸、床上1戸、床下1戸	S58災-32						
			高森町吉田河原の胡麻目川で土石流流入、床上浸水18戸、農地3.3ha埋没	S58災-33						
			橋木村伊久間で7戸の浸水被害が発生	S58災-34						
			飯田市上郷沼丹保の新戸川で溢水、床下浸水7戸	S58災-35						
			飯田市上郷黒田棚田の野鹿川で溢水、床下浸水6戸	S58災-36						
			飯田市松尾で床上浸水29戸	S58災-37						
			飯田市上久堅で家屋半壊5戸、床上浸水3戸、床下浸水25戸、死者1名	S58災-38						
			飯田市千代で家屋全壊3戸、半壊5戸、床上浸水5戸、床下浸水17戸	S58災-39						
			飯田市竜江で家屋半壊5戸	S58災-40						
			飯田市竜丘で床上浸水18戸、床下浸水4戸	S58災-41						
			飯田市川路で床上浸水7戸、床下浸水10戸	S58災-42						
			飯田市鼎地区上山の野畔川で床下浸水24戸	S58災-43						
			飯田市毛賀の、天竜川と毛賀沢川との合流点で108戸が浸水被害	S58災-44						
			下條村粒良脇の加竜川で護岸決壊、山崩れ等発生、家屋全壊1戸、半壊2戸、床上浸水9戸、床下浸水53戸	S58災-45						
阿南町秦草ダム付近富草大島で堤防決壊、家屋半壊1戸、床上浸水2戸	S58災-46									
秦草村三耕地で山崩れ、土石流、家屋全壊1戸、半壊1戸、床上浸水1戸、床下浸水5戸	S58災-47									
飯島橋決壊、伊那里地区孤立										

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意識	社会の動き		
1985.7.1	昭和60年7月1日	前線	与田切発電所建設現場で鉄砲水、3名死亡	S60災	台風6号により停滞していた梅雨前線の活動が活発となった。台風・梅雨前線の北上に伴い、県内は28日にも雨が降ったが、29日夕方県の南部から雨となり、次第に全県に広がる雨が降った。				昭和60年8月12日／日航ジャンボ機が墜落 豊田商事事件		
2006.7.15-19	平成18年7月15～19日	前線・台風 (台風18号)	藪輪町松島北島の天竜川右岸の堤防が決壊	H18災-1	台風18号は9月15日21時に沖の島島の南東海上で発生した。西北西に進んだ後、17日午後沖繩の南方海上で向きを北東に転じ、18日朝沖繩の南東海上を通過した。県内は、台風の北上に伴い南海上に停滞した秋雨前線の活動が活発化したため、18日早朝南部から雨になり、急速に北部まで広がって19日午後まで降り続いた。特に、台風が伊豆諸島海域を北上した19日は、前線が本州南岸まで北上して一段と活動を強めたため、未明から昼1時間15～57mmに達する強雨となり、阿南と南信濃村では任意3時間の降水量が100mmを越えた。総雨量が400mmを超える記録的な大雨。						
			藪輪町のたきの沢で土石流が発生し、大字中箕輪で非住家1戸床上浸水	H18災-2							
			藪輪町中箕輪の曲がり尾で土石流発生、3世帯が自主避難	H18災-3							
			藪輪町上古田で地すべりが発生	H18災-4							
			藪輪町中村の中の沢で土石流が発生し住宅33戸、公民館2施設に被害	H18災-5							
			辰野町大字小野で土石流が発生、4世帯が自主避難	H18災-6							
			辰野町下雨沢で土石流が発生し家屋に土砂が流入	H18災-7							
			辰野町小野中村で崩壊が発生し死者1人、全壊2戸	H18災-8							
			辰野町赤羽で崩壊が発生し全壊3戸、半壊4戸	H18災-9							
			伊那市諸町でがけ地が崩壊	H18災-10							
			伊那市松倉で土石流が発生	H18災-11							
			伊那市西春近で崩壊が発生し、中央道通行止め、家屋浸水被害6戸	H18災-12							
			岡谷市湊3丁目の小田井沢川で土石流が発生	H18災-13							
			岡谷市橋原の志平川で、土石流が住宅地を襲った	H18災-14							
岡谷市川岸駒沢の的場川で土石流が発生し住宅に被害が出た	H18災-15										
岡谷市鮎沢の本沢川で濁流が溢れる	H18災-16										



西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地原 No.	エピソード・意義	社会の動き
						○常官寺のはなし 「昔、横内村に常官寺という寺があった。ある時、高野山の御師が寺に泊まった。常官寺の住職はおかねを隠して御師に一文も与えなかった。御師は深く恨み、高野山に帰って参籠し祈願すると、常官寺一帯に一夜大雨が降り、大口(宮川茅野)で堤防が決壊して寺も住職も流されたという。それ以来、上川は今のようになり、銭場(宮川中河原)付近で井戸涸れをすると古銭が出るそうである。この時流された横内村の一部を開拓して中河原ができたという。」	D637	○御師の祈願(恨み)によってもたらされた洪水	
						○福次荒れ 「むかし、福次という人が車山で炭焼きをしていると、煙たいから炭焼きをやめろ、とトンゴン様(天狗)の声が出た。福次がやめないうで炭焼きを続けていると、大きい雷が鳴り、大雨になった。車山も音無川も大水が出て通れなくなり、大門回りでやつと家に帰ったという。今でもこの辺りで急に山が荒れだすと、こりやあ福次荒れだなあ、と言われるそうである。」	D608	○人の行いに対する天狗のいましめ(大水)	
						○聞かずの神様 「むかし、有實にへそ曲がりの神様がいました。雨乞いをすればよけいにかんかん照りにするし、洪水を止めてくれと頼めばよけいに雨を降らせる。少しも願い事を聞いてくれないので村人は、聞かずの神様、と呼んでいた。」	D609	○へそ曲がりの神様	
						○じ穴とばは穴 「下諏訪町の上水道水池付近にじ穴とばは穴と呼ばれる古墳がある。むかし、火の雨が降ったとき、この二つの穴に逃げ込んだ人だけが助かったという。今の下諏訪の人は、この二つの穴に逃げ込んだ人たちの子孫だといわれている。」	D610	○火の雨から護ってくれたじ穴、ばは穴	
						○毒沢の由来 「むかし豪雨に毒沢一帯が流された時、押し流されたとき、鉱泉が田畑に冠水し、養殖の鰻などが死んでしまったことや、毒沢一帯の河川には水生生物が生息しないといわれることから名がつけられたという。」	D611	○洪水による鉱泉の冠水の由来	

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き
						<p>○四王の由来 「茅野の宮川にある安国寺の門にたついでいた仁王たちが、ある夏、四・五日も大変な大雨が降り、どろ水に押し流されてとうとう諏訪湖の岸まで流されてきた。それを戻つけた漁師が代官所へ届けようと和尚に拾った場所の地名を尋ねた時、仁王が二つ流れ着いたことから四王だ、と和尚が名づけたという。」</p>	D612	○洪水によって流された仁王	
						<p>○諏訪大社下社の七不思議(浮島) 「春宮裏にある砥川の島。砥川は昔から暴れ川といわれているが、この島はどんな大水が出て来ても沈まないという。浮島には浮島社が祭られている。」</p>	D622	○洪水で沈まない島	
						<p>○しっぽのない赤いへび 「岡谷の西堀に住んでいたケチでふくよかなオフクというおばあさんが、二羽のつばめが軒下につくった巣を破り、つばめは悲しい声を出して、二羽のつばめがオフクばあさんの家に残して諏訪湖のほうへ消えていった。数日後、二羽のつばめがオフクばあさんの家へ運んできた夕顔のたねを植えると見事な夕顔が実った。輪切りにした夕顔の中から、赤いへびの真ん中を覗くと、赤いへびが這い出してきた。あきれオフクばあさんは、夕顔へびを小井川の一里塚のやぶの中に投げ捨てた。やぶの中で大きくなつたへびは、オフクばあさんが夕顔を輪切りにした時、しっぽのない赤いへびの大群がまわってきた。しっぽのない赤いへびの群がまわってきた。真赤に燃えた火のおびのように行進をして、地響きとともにオフクばあさんと家をひとおしに、塩尻峠へと消えていった。」</p>	D519	<p>○伝説の地(西堀・小井川地籍)は、岡谷市構河川の下流域に位置し、平成18年7月豪雨災害の時には土石流が発生している。 ○へびを呼んだつばめが諏訪湖方面からやってきたこと(諏訪湖には水神がいる)、地響きとともに家を押し流したことから、土石流災害のことと判断しました。</p>	

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き
						<p>○流された四王 「茅野の宮川にある安国寺の門にたつていた仁王たちは、たいくつであくびばかりしていたので、いかめしかった顔がだらしくなっていた。ある夏、四・五日も大変な大雨が降り、どろ水に押し流されてとうとう諏訪湖の岸まで流されてきた。その地を四王と名づけた和向に、たらしめない顔の仁王は寺におけないと言われた。仁王たちはやがて諏訪湖の出口に流れ着き、照光寺に祀られることになったが、二度と捨てられぬよう顔を引き締めて立っているという。」</p>	D613	○安国寺は宮川沿いの山の中にあるため、文章中の泥水に流されたというのは土石流の可能性が高いと思われる。	
						<p>(辰野町に伝わることわざ) ○とびが空に輪かくと雨が降る ○烏が10羽揃って鳴くと大風が出る ○蛇を川へ流せば雨が降る ○川魚がよく釣れると雨 ○煙突の煙が立ちはば雨、北へなびいても雨 ○守屋山の方へすすつとした雲が出ると雨になる ○釜へ水が廻れば雨がふる ○荒神山が近く見ると雨が降る ○天竜川の瀬音が高くなれば雨がふる ○夕方山鳴りがすると大嵐になる ○みみずがよい声で鳴けば雨が降る ○草履と下駄をちんばにばれば雨が降る</p>	D585		

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き
						<p>○辰野縁起 「信濃の山の重なるの間に信濃神二湖（しなのかむいのにこ）と呼ばれる青く澄んだ二つの湖が一筋に入り江に結ばれて並んでいた。上の湖を諏訪の湖、下の湖は伊奈の湖ともいった。古くから湖の底には魔の神が住み、時には魔人の怒りが嵐を呼び、洪水をきたした。そこで村人は、魔の季節に入る六月六日になると湖の南にある小高い荒神の岡に集まり、音木を打ち祝詞をあげる。二歳になる雌鹿を湖底に沈めて生贖をする習慣を持つようになった。ある年にこの祭りが終わった直後、一天候にかき曇り七日七晩嵐が続き、いっこうに霽える様子がなかった。東の村に住むおさの娘・梨重は自ら生贖に代わって湖に飛びこもうとした時嵐の中から、待てしほし七月七日竜天へ昇る、という声が聞こえてきた。七月七日の雲ひとつなく日が天頂にさしかかった時、たちまちに凄まじい暴風雨となり、大轟音とともに青白い鱗を閃めかせた大竜が狂傲な舞を見せて北の山頂へと消えていった。そして湖の水は荒神の岡の東と西両端を破って一気に南へ流れ去った。七月七日竜は天に去り、今まで湖の底だったところに野はひらけ、村には平和と喜びの日が続いた。この時からだれも言うともなくこの土地を竜の住んだ野、竜野といい、流れる川を竜天竜というようになったという。」</p>	D644	○竜の昇天伝説と竜野・竜川の由来	
						<p>○沓掛石 「楡沢街道沿いにある、日本武尊が東征の帰途に休まれたてわらじの紐をしめなおしたといわれる一坪大の石。窪みには常に水が溜まり、水が絶えたと雨が降るといふ。（郷土資料）」</p>	D614	○雨をもたらず石	

西層	和層	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意識	社会の動き
						<p>○蛇石 「昔千洲には、五十間を越えるほどのたいへん気のやさしい主の大蛇が子供と一緒に遊んでいた。その頃、大滝沢に種んでいた二匹の兄弟竜が、ときどき暴れては大嵐を呼びおこして大水を出し、村人を苦しめていた。兄弟竜は獲物のイノシシをめぐって大ゲンカをはじめたので、大嵐となった。木が倒れ、山が崩れ、大水が出て土や石や倒れた木々がゴロゴロと横川を流れていった。千洲に棲む大蛇は川下の人間たちを思い、子供を竜に溺れさせるような声をかけてから上流へと向かった。ひときわ川幅の狭まった辺りまで来ると、倒れた木々に堰き止められて小さいダムが出来ていた。大蛇は頭をもたげて出来たばかりの木や石の土手を崩しはじめたが、次々に木や石が流れてくるので苦しい水との闘いとなった。大蛇の子は帰って来ない母を心配し、傷をおいながら頭をもたげ続けている母蛇を尻つけた。大蛇とその子供は長い間水と闘っていたが、嵐が静まる頃、とうとう力つきて川底に半分埋まり、寄り添うように息をひきとってしまった。熊野権現様は兄弟竜のいたずらを大変怒り、竜たちを大滝沢にある大滝に閉じ込めてしまった。村人たちは命をすててまで助けてくれた大蛇たちを大層あわれがり、いつまでもその美しい心が残るようと、石の姿に愛えたという。こうして、大小二筋の蛇石が横川の川底にでき、いつまでも村人を守ってくれることになったという。」</p>	D640	○土石流から村人を救った大蛇の子	
						<p>○百々洲の沈鐘 「上辰野と宮所の間横川の百々橋下に大きな洲があり、そこを昔から百々洲といってきた。昔この洲の上にはお堂があり、長い年月の間に荒れて、ついにお堂は洲に崩れ込んでしまった。このため、お堂の釣鐘と一緒に洲に沈んでしまった。沈んだ鐘は大蛇になり、洲の主になって人がそばに来ると巻き込んでしまうという。」</p>	D643	○主の大蛇となった釣鐘	

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・叢書	社会の動き
						<p>○洞ヶ入鐘楼堂 「上平出郡落の南端、地名大門を東の山の谷間に入ること約二町、山の中腹に鐘楼堂があった。昔、そこから山抜けをして鐘楼堂は泥砂と共に押し流され、鐘楼は天竜川の百々の淵にころびこんで大蛇となり、淵の主になったという。(長野県上伊那誌 民俗編上より)」</p>	D605	<p>○洪水で流された鐘楼が大蛇となる ○鐘は雨乞いに使われる事例は全国にみられる</p>	
						<p>○八王子神社の伝説 「昔々、八王子神社は素盞鳴尊という神様が便りにしていた八人の御子がおなくなりになられ、神として祀られたという。大古に平出・下辰野地区はすべて湖水になっていた。大蛇が榎み辰の湖といたが、大蛇の祟りと恐れ、八人の御子の霊を祀って無病をお祈りしたところ、病氣は忽ち治ったという。」</p>	D645	<p>○洪水がもたらした地変による地名の由来</p>	
						<p>○腰掛石 「有賀峠へ登る道の平出のはずれの傍に、むかし明神様を勧請するとき御輿をこまでかついてきて動かなくなり、石の上に置いて休んだという石がある。曾てその傍を流れる上野川が氾濫した時、この石に堰がれて水の方向が変わったため、平出の村はほとんど書を被らなかつたという。(郷土 石号)」</p>	D616	<p>○洪水から護つてくれた石</p>	
						<p>○辰野のいわれ 「むかしの荒神山は今より大きく、東と西の山脈までつながっていて、天竜川をせきとめ、そこに湖ができていた。その湖には竜神が住んでいて、天に昇ったり降りたりしていた。ある時の大雨で湖の水が氾濫し、荒神山の東と西を切り崩して水が流れ出し、干上がった。水がなくなったので竜は天に昇ってしまい、今は野になつてしまつた。ここを竜神がいたところから龍野(辰野)というようになった。」</p>	D533		

西暦	和暦	勝因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き
						<p>○沢底の蛇の池 「沢底の山寺に堂平という所に蛇の池とよぶ小さい底なしの池があり、昔に大蛇がすんでいたが大雷雨で山抜けした時、一緒に流れて行方が分からなくなりました。池から七、八間ほど離れたところに蛇抜けといって蛇の抜け出したあとがあるという、この池を掻き回すと雨が降るといって、誰も昔から手を出したものがいないという。」</p>	D604	○土石流災害の伝承(蛇抜け) ○平成18年豪雨災害の時、沢底川の岸辺にある赤羽(山寺より下流)というところで土石流が発生した。	
						<p>(箕輪町に伝わることわざ) ○底野の汽車の気笛が聞えること雨 ○天竜川を虹がまたぐと雨 ○雨つぶりくほたるぶくろ)をどると雨 ○かほちやのつるが太いと風が吹く ○山かかが出ると晴、音だいしようが出る と雨 ○蚊がもちをつくと雨 ○ひじろの煙が家の中にこもると雨 ○腰がいたむと、あかきれがいたいと、しもやけがかいいと、神経痛がおおくと、どれも雨 ○子どもがお茶をのむと風がふく ○めだかが群になって泳げば雨</p>	D594		
						<p>○帯無川 「弘法大師が帯を流して水を封じたので、水が下の方へ流れなくなったという。この西の山を雲が常に帯を巻いたようにかかっているところから帯巻山と呼んだ。その山から流れ出る川というので帯巻川と言ったのが、いつの間にか誤って帯無川というようになった。(笠原政市氏)」</p>	D617	○H18年7月豪雨災害時(19日)6:40 帯無川線路付近決壊の恐れ9:15 帯無川国道西教員住宅付近決壊の恐れ(箕輪町ホームページ)	
						<p>○おさんや(彦連り)の伝説 「昔から毎年お盆におこなわれる行事。村の南を通る田無川から上げて灌漑用水にしている大堰が村の中を南から北へと流れて、北から南へ流れる天竜川の流れと反対の所謂逆さ川であるため、そこからおこる災厄から逃れるために始まったと伝えられている。昔凶年に三年ばかり止めていたから疫病が大流行したので、怖れられてまた復活したという。」</p>	D627	○災難よけの行事	

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き
						○経塚 「大軒屋の崖ざわに、小さな塚が点在して いて経塚と言っていた。昔、洪水を防ぐた めに読経して水難除けを祈願し、経を埋め たところという。以前四十八ヶ所あったとい うが、今は開墾の際崩されてその数が少な い。」	D618		
						○北風が吹くと大水がでる	D551		
						○草餅地蔵 「伊那市にいつの頃から三峰川の大満 水の時、奥の方の村から石地蔵が流れて きた。水がひけてから村人が見つけ、この 地に祀ったという。願い事が叶うと年の数 だけ団子をあげる。四月二十四日の縁日 では、村の人たちは草餅をあげる。」	D602	○水害とともにやっ てきた御利益の 多い地蔵	
						○おや子石 「ずつとむかしのこと、大地震で地山が崩 れて土砂がどとどと押し出した。地山に住 んでいたおや子の山犬がおたまたま逃げ て出した。御堂垣外まで来た時、父犬は藤 葉の蛇抜けに押し流されて石になった。母 犬と子犬は中条まできてびつたりと座り込 んだまま二つの石になったという。それらの 石は今はない。」 ○犬石 「昔、地山が押し出したとき、犬石・犬石・小 犬石の三個の犬石が囓いて逃げた。犬石 (親石)は強いので地山のすぐ下に止まり、 女親石は500メートルほど離れたところに止 まり、子供石は8キロメートル離れた長藤村 の中条という所に止まったという。」	D606	○地震による土石 流 ○土石流によって流 されてきた石の由来	
						○「地山おしだす 犬石ほえる。ないてにげ るは、子つれ石。」			
						○守屋山(モリヤマサマ) 「伊那と諏訪の境にそびえる守屋山には、 守屋大神の石の祠が祀られている。山中 で乱暴すれば山が荒れるといわれ、守屋 山の頭すれは雲のある時は必ず麓の村々に雨 が降るといわれている。」	D540	○モリヤマサマ信仰	

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き
						○守屋貞治の犬聖不動明王「高遠を流れる三峰川は、たびたび洪水をおこした。その氾濫を鎮めるために、水切り不動として造立したのか、高遠町勝間の常盤橋西側に全長1.5mの犬聖不動明王がある。作者は高遠石工の守屋貞治で、最高傑作の一つといわれている。」	D601		
						○米高岩「天女橋の下にある。三峰川の水がその岩に当たって流れる年は、お米の値段が高いという。」	D619	○水位の変化による洪水予知	
						(長谷に伝わることわざ) ○夕方地震があると日干が練く ○蜂の巣が低い場所にある年は大風が吹く ○水こい鳥が鳴くと雨が降る ○西駒へ雲が出ると近いうちに雨 ○中屋四沢になると雨が降る ○煙草の香りが良いときは雨が降る ○鱈が巣を持ち上げると雨が降る ○女沢雨はこわくない ○北の入り霧が入ると雨 ○雨蛙がなくと雨が降る ○猫が耳を越して顔を洗うと雨 ○戸倉へ霧がかかれば雨 ○和泉原の平へ霧が降りると雨 ○釜無(釜無山)へ霧がはいると雨が降る ○穴風の吹くとき、羊の先へ鎌をしばりつけて、屋根棟へ立てれば風除けとなる ○水柱、水内梁、雪の桁、雨の垂木に露の茸き草と唱える ○火の夢は水出、水の夢は火事がある	D544		
						○風穴「浦村に風穴といひ伝ふる所あり。前浦奥浦の間山の尾先に松柏茂りたる森の内には、屈曲の岩重なりたる中に常に風を生ず。此岩を動かす或いは穴を鼻んとすれば、必ず大風吹きて荒れる。よって里民制して刃りへ寄ること禁す。此岩の上に風穴大明神という祠あり。この穴の口へ鼻紙を置けば今も空へ吹き上るぞ。(木の下蔭巻之下)」	D620		

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まっわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き
						<p>○栗沢川の河川工事 「むかし栗沢川は市野瀬部落の中を流れて流れてきた。この川は洪水になるとしばしば氾濫し、部落は被害を蒙っていた。天保十三年(1842)に城山の南の尾根を掘りぬいて切り通しを造り、栗沢川は市野瀬と分れて三峰川に流れ落ちるようになった。これにより、部落は災害から免れるようになった。田んぼの敷も相当に増えたという。」</p>	1842- D528	○栗沢川の河川工事による減災効果	
						<p>○戸倉沢垣外の市野瀬城跡 「むかし戸倉沢垣外(市野瀬の西南のほう)には、市野瀬城があったと伝えられている。今は栗沢川や熊堂川の洪水のために、一帯が荒れ果ててしまし、草に覆われた小高い丘と窪印塔が埋もれている。」</p>	D545	○洪水による荒地跡	
						<p>○赤河原 「おむかし、戸台川(伊那市長谷黒河内)の上流に一匹の大蛇が纏んでいた。時々里に出てきては危害を加えていた。時々の人たちは毎日恐れおののいていた。そのころ、日本武尊が、景行天皇のご命令によって軍国の悪者征伐にでた帰りの途中に入野谷に立ち寄り、悪い大蛇の話を知り、大蛇を斬り殺した。このとき、大蛇の切り口から物凄い勢いで血潮が吹き出し、そのあたり一帯の河原を真っ赤に染めた。それ以来、河原の石はどれもみな真っ赤になっていて、その河原を赤河原と呼ぶようになったという。」</p> <p>○三峰川の七石 「戸台川上流の大蛇が日本武尊に切りつけられた時、断末魔の苦しみから広い河原の中をたうちまわった。あたりの大地はどろろきゆるぎ、大蛇の大きな七色の鱗が火花のように高く散らばって大きな虹をつくった。きれいに大空を彩った七色の鱗の虹は、やがて流れ星のように星をひいて三峰川の源となっている南アルプスの谷々に吸い込まれるよう落ちていった。現在三峰川にある七色の石は、このとき飛び散った大蛇の七色の鱗であると言われ、人々は三峰川の七石と呼んでいる。」</p>	D527	○戸台川の大蛇の悪行 ○日本武尊の大蛇退治 ○赤河原の地名の由来	

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き
						<p>○黒河内長者屋敷 「大揚寺へ登る門気坂の上に住んでいた長者の美しい一人娘のところに、毎晩訪れる美青年がいた。その美青年は戸倉山の池に住んでいる大蛇の化身だという噂が広がった。娘は確かめようと、男の着物の裾に針を刺して帰らせた。次の夜、男は現れず、天地もどろくほどの雷鳴と大暴風雨に変わり、忽ちのうちに三峰川が大洪水となった。翌朝、大蛇の屍が激流に流されていく姿が見られた。」</p>	D505	<p>○曹洞宗 大揚寺 (〒396-0403 上伊那郡長谷村大字黒河内358 / TEL:0265-98-2144) ○戸倉山(伊那富士)の主 ○大蛇の化身(美青年)</p>	
						<p>○無縁仏 「大田切川の岸辺に、俗に無縁仏と呼ばれる石仏群がある。昔からこの川の洪水によって死んでしまった旅人の霊を供養した石仏と伝えられている。」</p>	D603		
						<p>○高鳥谷山(たかすやま)の伝説 「住吉、貞沼村北林にいた井上掃部という地侍が、一日山野に入り狼を射ていた。すると、黒雲が立ちこめ雷が天地を震い、大雨が激しく降り出したので侍は帰路を失ってしまった。二昼夜野宿し、精神が朦朧とするにいたり、無事に帰れた時は高鳥谷山の絶頂に一社創建すると猿田彦命に信願したところ、雨がやみ目の前に山鳥が現れた。これを捕まえようと跡を追っていくと、侍は神懸の霊威を感じ、山頂に高鳥谷天狗(猿田彦命)を祀り神殿を営むようになったという。」</p>	D537		
						<p>○濃ヶ池 「駒ヶ岳の主が棲んでいて、荒らせばたちまち雨が降るといふ。昔、駒ヶ岳の窟の内の言という部族に母親と二人きりで暮らしていた娘が、大蛇の化身であった若者の後を追ってこの池に身を投じ、若者は雷に、娘は鬼と化して池に構むようになつたといふ。濃ヶ池とも称し、平天にこの池に登り雨乞いをするれば効験が有るといふ。」</p>	D628	<p>○駒ヶ岳の主である竜と鬼の由来</p>	

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・遺業	社会の動き
						○浮島の伝説 「天竜川の赤穂小鍛冶と中沢穴山の境に浮島と呼ばれる塚があった。中央に水神様が祀られ、周囲には赤松5、6本が立ち、川の水がどんなに増水しても流むことがなかったという。むかし、真の山から鹿が出て穴山や付近の人々が捕らえて皮を剥いたところ、子を腹に宿していた。哀れに思った里人が、その袋子を浮島へ埋めた。母鹿は小鹿を溺れさせまいとして、満水の時には島を浮き上がらせたという。昭和初期に吉瀬ダムが構築によって年々河床が上昇し、現在は河床に埋没してしまっただ。」	D536	○浮島伝説 ○ダムが河床上昇による埋没	
						○落石 「昔、天から落ちた石が林の中にあつてそこに落石神社を祀った。母乳が出ないとき、この石にお参りし、石に生えている苔を煎じて飲めば、乳の代わりになるという。(中沢伝説集)」	D623		
						○仏石 「昔、山から流れてきた位牌が乗っていた岩だといふ。大きな岩で、現在稲荷神社が祀つてある。」	D621	○流されてきた仏様	
						○隅の木 「隅の木と称する栗の木があった。正徳五年未満水の時、与田切川が氾濫し、沿岸の田家が堰ね流出してしまつた。人々はわすかに身を以て免れ、隅の木の傍に集いて危難を脱することができたという。この隅の木の老朽化が進み伐採することになった時、その願を記すために隅の木牌が建立された。」	D629	○洪水から護つてくれた葉の木	
						○鬼の島・鬼の的 「与田切川の吐き出しに、鬼がもつて土を担ぎ空け出したら出来た島と、もつてどんと払つたら横に小さな島ができたという。また、駒ヶ岳に住んでいる鬼神が、ここに標的を置いて山頂より弓を引いて留つたと言ひ伝えられている。」	D630	○鬼がもたらした地	
						○東夕立(東山からの雷雨)は来そうでこないが来ればでつかい ○霧山に霧が立っている内は雨が止まない	D568		

西暦	和暦	勝因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き
						○座頭なぎ 「昔、座頭が数人で京へ上る途中、なぎ踊 れにあつて悲惨な死をうけた。山の木を切 ることがなぎ崩れの原因であるとし、再びこ のような惨事が起こらないことを願って、座 頭なぎの松伐るべからず、との申し合わせ が遺言として残されている。」	D636	○土石流被害の教 訓	
						○黒牛の風穴 「中川村大草美里(黒牛)地籍の風穴という 所に、風三郎と呼ぶ風の神が祀られてい る。風の神が嫌っている神楽の獅子や越後 獅子が宮の入坂より風へ巻つたならば、た ちまちに暴風を巻き起こすと伝えられてい る。駒ヶ嶺市大御食神社の神代文字によつ て書かれた社伝記には、五昼夜にわたり 吹き荒れた暴風雨を黒牛の風の神の祟り であるとして祭り鎮めたことが記されてい る。」	D539		
						○天女鱗霊神(あめますらいじん) 「むかし、飯沼の家の田植えに毎年素性の 知れない美しい夫婦が手伝いに来た。田植 えじまの時、赤飯をご馳走になると、いず くもなく立ち去った。ある日この家の男衆 がわみ沢の淵で魚釣りをしたところ、大きな あめのうおが釣れた。腹を割いてみたところ 中からたたくさんの赤飯が出てきた。翌年 の田植えに美しい姿の夫婦が現れなかつ たことから、夫婦がわみ沢に住むあめのう おの化身であったことを知った。そこでわみ 沢の淵を昇下ろす林の中に祠を造り、天女 鱗霊神として祀ったところ、夜になると淵か ら「あめますざらば」と呼ぶ声が聞こえてき た。それから来る年ごとに飯沼の家の田植 えには、よく雨が降ったという。36災害の 時、その淵の面影はすっかりなくなつてし まった。」	D538	○雨をもたすあめ のうおの化身 ○36災害による伝 承地形の変化	
						○惣兵衛の人柱 ○妻わら堰防(惣兵衛の末孫中村初太郎 翁談片)			
						○地藏沢 「ある年、小園を流れる小川が氾濫し一面 を荒らしまわった。水がひいたある朝、水番 の爺さんが半身を泥の中に埋めたお地藏 様を河原で見つけた。もったいないと大勢 で担ぎ上げ、小さいお堂を建てて祀った。 (地藏堂)この以来その地を地藏沢というよ うになつたという。」	D631	○洪水によつてもた らされた地藏様と地 名の由来	

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き
						<p>○明神様の瀬分け鎌 「大昔、天竜川に大水が出て瀬が代わると田村の新田は押し流されてしまうということで、大水がでると村中の人々が明神様を祀りして、神様から瀬分け鎌をいただき、天勢の若連中がこの鎌を持って瀬になり、天竜川へ入って瀬分け鎌を引くとたちまちに瀬が代わって村が助かったという。この明神様と池野氏の八幡様と合わせ祀ることになって現在の諏訪神社に移った。」</p>	D632	○洪水の瀬を分け て村を救う瀬分け鎌 の信仰	
						<p>(喬木村に伝わることわざ) ○猫が頭越しに耳をかくと雨 ○池の鯉がはねると近いうちに雨 ○権現山の頭が見えるうちは雨は降って来ない ○蛇が木に登ると雨 ○夕方子供がさわぐと雨 ○赤とんぼがたくさん飛ぶのは雨が近い ○山が近く見える時は雨 ○黄色い朝焼けは天気、赤い朝焼けは雨</p>	D564		
						<p>○九十九谷の伝説 「九十九谷がまだ百谷あった頃、その谷底に鬼が住んでいた。ある年の大荒れで一谷が埋まり九十九谷となった時、鬼は逃げ出して三里西山の市田村の大島へとび出した。その拍子に石の上の手をついた。その時の手の跡が深く石に残り、その窪みの中にたえず溜まっている雨水をいぼにつけると奇妙にも治るといふ。九十九谷を百と数えたら最後、鬼が出るか蛇が出るか、村中はふみ荒されてしまふと云うので、二本の指を一本折っていつでも九十九と数えねばならない。(喬木村史談会 喬木村の伝説)」</p> <p>○小川川の濁り水 「少しでも雨が降ると濁った水が流れていて、雨が降ると九十九谷が崩壊して、谷川の水を堰きとめてそこに水がたまると堰が崩れて出水となったり、濁った水が流れるようになり、下流で鯉を飼っている農家でその水を使うと鯉が死に、生産が激減して困ったと云う。(古老の語り)」</p>	D507	○谷に棲む鬼に對する畏怖の念	

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社金の動き
						<p>○九十九谷 「村人が命をかけし谷々に萌えづる春の光 さしたり 断層を削る作業に取り組みしらの 偉業永久に亡びざらむ 冬の月は暮るる に早し谷々は雪に埋みて夕昏らみたり(村 沢武夫)」</p>		○後代に伝えたい	
						<p>○悪い滝の主を退治した勇士 「瀬戸の滝には大蛇が棲んでいた。大蛇は 毎年八月になると大水をだし、阿島の水田 を流してしまつた。村人は大蛇を退治した いと考えて、勇士がでかけていくのだが一 人も帰ってこなかつた。ある年、通りかかつ た旅の武士に大蛇退治をお願いしたとこ ろ、武士は引き裂けて大蛇を倒して帰って きた。それから水もでなくなり、阿島の水田 は秋になると稲穂が波打つようになつた。 後に大蛇を退治した武士は、上郷の野底 山の姫宮で七七退治で有名な岩見重太郎 であることがわかつたという。」</p>	D633	○滝の主である洪 水をもたらず大蛇退 治	
						<p>○観音なぎと駒石 「遠いむかし、青木川のさきの高いところに あるあかなぎに住んでいた観音様、引の 田に住みたくなつて馬に乗って引越しをし た。そのときの馬の蹴り上げで山が崩れ、 でつかいなぎになつてしまつたので観音な ぎというよつになつた。引の田のでつかい石 にひとつとびに飛んだ拍子で石がひっくりか えつてしまひ、馬の足跡がついた方が下つ かわりになつた。村の衆はその下で雨宿りが できた。そこは石の上で雪が降つても下側 は雨になるということ、その駒石を村中で 大事にしている。」</p>	D624	○観音さまの引越 し と土石流	
						<p>○烏帽子(えぼし岩) 「仙人が烏帽子を忘れて去つたあとにでき た岩とされている。相次ぐ洪水の際の出水 の指標とされてきた。」</p>	D511	○出水の指標 ○水害による家屋 移転の歴史	
						<p>○川路と龍江の境界争い 「両村で、水害による争いがあった。」</p>	D566	○災害がもたらす境 界紛争	



西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き
						<p>○地蔵岩 「開沢の奥深くまで薪を取りに行った人が逃げた。夕方になって狼が来たので、驚いて山から岩が落ちてきて、狼に当たって殺してしまっただけで助かった。その岩は地蔵岩といわれて今も道端にあり、雨が降りだす前などには岩の表面に地蔵様の姿が現れるという。」</p>	D634	○岩を落として村人を助けた山の神	
						<p>○池が洞の主 「城山の池が洞にある池に、永年大蛇とも山椒かじかともいいうまが纏んでいた。池の堤がだんだん欠けてきて、いよいよ憂慮する。須志角の河原を通って下條の深見の池へ移った。山の奥宮辺には、その通過した道筋が軋れて小川くらの跡が残っている。」</p>	D635	○大蛇の下条村深見の池への引越し	
						<p>(上久堅に伝わることわざ) ○南山に雲がかかると雨が降る ○恵那山に雨が降るとすぐこつちにやってくる ○鍋の底に火がつくと雨が降る ○東夕立は降りが強く長い ○雨蛙が鳴くと雨が降る ○雲が北へ向くと必ず雨、東に向くと小雨 ○峰が鼻を高い所につくると強風がなく、低い所につくると台風がくる</p>	D		
						<p>○池城の明神様(宇佐八幡・不動明王)を祀ったお宮 「池城に住んでいた明神様(雨乞いの神様)は、人々が盛んに行った焼き畑のせいで毎日煙たい思いをしていた。そして池の周りも焼き払われ明るくなってしまったので、池の水を持って今のお池に移られた。水のなくなつた池に残る石には、明神様が映り化粧をしていたことから鏡石と呼ばれている。」</p>	D515	○自然の調和をみだす行い	
						<p>○中郷の流れ宮 「中郷の分校だったところに大きな岩があつて諏訪明神が祭つてあつた。いつかの大雨で流され、今の諏訪宮まで流されたので、それ以後もとの場所を流れ宮というようになった。」</p>	D569	○洪水によって流されたもの	

西暦	和暦	勝因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き
						○池大明神 「須沢の利檢沢のケブツタが池に住んでいた池大明神が、人々が盛んに行った焼き畑の煙に追われ今のお池に移った。」	D516		
						○石のコケテ来ない(落ちてこない)ところ、水の近いところ、風の当たらないところ、に家を建てる	D571		
						○かけ踊り(お盆) 「雨乞いの踊りを年中行事化したものといわれている。お池が、雨乞いの池として信仰を集めていた。」	D572		
						○霜目祭(12月13日～14日、下栗の拾五社大明神)と龍頭(タツガシラ) 「龍頭(タツガシラ)と呼ばれる面は池大明神の化身を表し、荒れ狂う龍頭を獲る面をかぶった子どもが二本の棒でたたき、傷ついた龍頭のたうちまわる所作が演じられる。かつては面の口を開けると大水がでるといわれたことから、口を閉じて演じられた。」	D573		
						○諏訪宮のなぎがま 「諏訪宮(大洪水で流れ宮にあった諏訪明神が流れ着いたところ)にはなぎがまが二本祭っており、上町付近では御射山の祭りをすするようになった。水害にあったときは、柳宣様がなぎがまを持って川に行き、川すしをひくとその通りになった。古瀬良男氏と古瀬右京氏が若い頃に一度やった時、ちいっとは川すじが変わった。」 ○なぎ鎌・瀬分け鎌(呪具) 「本来諏訪信仰の中で風切りの強い鎌として用いられたものが、天竜川流域では洪水の瀬を切る道具として用いられた。(榎本正治)」	D570	○自然をコントロールしようとする人々の意思が語られている伝説	
						○御射山の祭り 「なぎがまが二本お祀りしてある諏訪宮のお祭り。(8月25～26日)」	D575	○自然をコントロールしようとする人々の意思が語られている伝説	

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地原 No.	エピソード・意識	社会の動き
						○山の神・水神碑とオタカラ 「山の神・水神碑とオタカラ(山の神を表す赤い半紙と水神を表す白い半紙を二つに折り、竹串にはさむ幣束)による信仰。」			
						○水神・山の神 「遠山谷では、台風や集中豪雨の時に水荒れ(洪水)と山荒れ(山崩れ)とが同時に人々に襲いかかってくることから、山と水が関連する場所(山峡の橋のたもとや川を見下ろす山裾など)に水神・山の神の碑を立て荒ぶる神を静めた。また、山の神と水の神が結び合って水の供給源となることから、水神・山の神碑は水源となる山にも祀られている。」			
						(清内路村に伝わることわざ)○大雨が降った時、沢水が急に止まると、鉄砲水がくる ○トウモロコシの根が上がって張ると、雨風が多い ○豊那太立は長降りがつづく ○上げの大風は、災害をつれてくる ○朝でつかり、(日射)後に雨 ○水瓶が、汗をかくと雨が降る ○鯉がはねると、雨が降る ○大裾(地名)に霧が立てば、雨降り ○大川の洪水が早くひとまだ雨が降る ○膝や、頭痛がすると、雨が降る(フリケラヤム) ○カミカンド(上川渡)の瀬音が、近く聞こえるとき、雨が降る ○ヨキトギ山に雲がはいると雨 ○御窟様の手洗水をまぜると雨が降る ○グマン峰の巢のひくい年は台風がくる ○熊笹の実がなると災害がくる	D563		

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地区 No.	エピソード・意義	社会の動き	
						<p>○明神山の太蛇 「大蛇(胴回り三尺、丈は三十尺)、目は北極星のように光り体は青白い鱗のようであった。その大蛇を近くで見たものは発熱し病気になる。不老な大蛇は猛威をふるい黒川、大平、松川入り方まで一夜にして獲物を探し回った。何年か過ぎ大蛇が衰え始めたとき、千年の大木が見る間に燃え、折柄の風に煽られ金山が火の海になった。村人が山を見ると大蛇が口から炎を吐いて燃え火の海に浸っていた。その姿は神々しいまでに荘厳であった。そのとき大雷雨となり大蛇のあたりから黒雲が湧き上がり、七月七日夜、燃えた大蛇のあぶらで谷川の水が濁り八日ついに大蛇は燃えつき石をまいていた体がバラバラになった途端、千貫の大石は生きあるもののように転がりだして十町余り下った村里の家の裏でピタリと止まった。今でもその石はどつかりとよきどきの蛇抜けを防ぐかのようにつらつら、村のひとびとにめづらしがられている。」</p>	D646	○蛇抜けから民家を守る石になった大蛇の最後		
						<p>○蛇出しが池 「むかし浪合村恩田のお百姓が、家のうらてにある沼のあたりの草を刈ってきて馬に食べさせたところ、馬は苦しがり血を吐いて死んでしまった。近所の人たちは、その沼には池の主が住んでいるといっている。翌朝、草を食べさせたからだと断言していた。翌朝、草を刈ったところが大きな池となり水が湧き出ていたので、お百姓はびびりして池の端に祠を祀った。何年かたったある夜のこと、お百姓の夢枕に主が立ち、蛇出しが池に住んでいた体が池いっぱいになって住みにくいので蛇峠の上に池をつくって明日ゆくと、と言った。翌日、西の方から真っ黒い雲がでてきて池の面が騒がしくなり、池の主が雲にのって蛇峠の方へ消えていったといふ。」</p>	D560	○大蛇の引越し		

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き
						<p>○蛇峠の池(蛇が池) 「むかし蛇峠に大きな池があり、主の大蛇が棲むといわれ蛇が池と呼ばれていた。ある日、峠の方から見馴れぬ小娘が下りてきて、村の庄屋に今日から深見へまいると馴れ馴れしく暇乞いをした。不思議に思った庄屋が後をつけていくと、波合川の橋の途中で姿が消え、大水が流れ落ちていくように見えた。それで初めて小娘は蛇が池の主であったと知った。その日、大下条村深見の里に大きな池ができた。今では、この池を雨乞ひ淵と呼び、旱の時にこの池の水を汲んできて神に供えて雨乞いすると、必ず雨が降るといふ。村の人たちは、水出を恐れて平常は一切この池の水を汲まないようにしているという。」</p>	D530	○雨乞いの恩恵(蛇が池)	
						<p>(秦島村に伝わることわざ) ○梅雨時に鳴神山に山崩れがあると梅雨が明け ○天竜川に沿って雲がのぼると雨が降る ○遠山祭りが始まると山が荒れる ○打米霧はあと晴れる ○旱魃に鳴神山でお祭りすると三日以内に雨が降る ○八森峠の霧が天竜川を押しと雨になる ○峰の鼻が低いと大風が吹く ○帆掛け船の帆が利くと翌日は雨となる ○三カ月の上弦の時は雨が多く下弦の時は雨が少ない ○向かいの山(大下条)を霧が北に這うちは雨は上がらない ○川の瀬音が高いと雨が近い ○タルノ沢の霧が怒田に下ると雨になる</p>	D567		

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き	
						<p>○成瀬が淵の女 「むかし田本のある家に氣立てがよく美しい女中がいて主人から愛されるようになり、淵を宿した。いつも女は井戸をのぞいては、自分の姿を見ていたというが、ある日西空に入道雲が出、たちまちに雷雨となり女の姿が消えた。ある夜、主人の夢枕に女が立ち、不憚に思うなら遠江国の成瀬が淵にきて、女の名を記した紙を淵に沈め、大きな声で名を呼んでほしい、と言った。主人は何日もかかってその淵を見つけ再会を喜んだ。やがて別れの時、女は寂しげな表情で水の中に帰っていく姿を見ないでほしいと頼んだが、主人がもう一目姿をみたいと振り向くと大蛇が金色のうろこをひらめかし、十二本の角で波を掻き分けながら淵の底へと沈んでいった。それから田本の里には凶事が続いたので、里人たちは成瀬が淵のたたりでありと言ひ、蛇の姿を石に刻んで神に祭り、毎年盛んなお祭りをして大蛇のたたりを鎮めるようになったという。」</p>	D525	○成瀬が淵(遠江)の大蛇のたたり		
						<p>○とうちやげの池の主 「むかし神原村唐沢にあったとうちやげの池の主が、ある年の大雨で池の水が次潰しなくなってしまうので、深見の池に逃げてきた。それから近くの寺では、鐘をつく大蛇が襲れ出すからと言って、鐘をつく事を止めたといい。」</p>	D576	○大蛇の引越し		
						<p>○大蛇になった母 「天正十五年(1587)吉田城の下条氏が没落した。その知らせを聞いた下條康氏の母は戒を抜け出し、深見の百姓家に隠れていた。間もなく訴人があつて身が危なくなつたので、母は井戸へ身を投げた。すると井戸が一夜に腫れて大きな池になった。大蛇の姿になった池の主は世を呪って村中の田畑を荒しまわつたので、百姓たちは祠を建てて死者の霊を慰めた。この池ができてから近くの寺では、鐘をつく大蛇が襲れ出すからと言って、鐘を潰く事を止めたといい。」</p>	D579	○人への恨みが大蛇と化身した		

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意識	社会の動き
						<p>○深草の祇園祭 「竜神様のお怒りを静めるために行われるようになった。祭りの準備7月第4土曜日に行われ、地元では“にわくさ”と呼んでる。氏子総代と4人の氏子がみんなでひとり1束ずつのワラを持って神社に集まり、神殿から池の水の出入口までワラでしめ縄を張る。池に浮かべるイカダや高さ66mののびる三国の櫓、御旗、提灯、花火などの準備をし、夕方になって津島様を神輿に移し、神前の庭に運び出して行列が進められる。神輿を担ぐ人の衣装は、白衣に青袴と決まっている。行列は三国の櫓の周囲を3周し、獅子頭を先頭に池に向かって降りていき、イカダに乗り移ると12の提灯に灯が点く。イカダが岸を離れると花火が打ち上げられ、湖上で祭典が始まる。フィナーレは、神輿が神社に戻ってからで、三国の櫓に仕込んである花火に火が点けられ、人々は火の粉を浴びながら踊り回る。また、イカダに汚れた者が乗った時には、龍神の怒りでイカダが沈むという。」</p> <p>○津島社 「諏訪神社(深見地区の鎮守様)境内にある。竜神さまのお怒りを静めるために祀られた。」</p>	D577	○主(大蛇)の怒りを鎮めるお祭り	
						<p>○雷岩と呼ばれり岩 「夏の日照りが続いたので、働き者のていころろが家に鳥子のやすべいを置いて、毎日水汲みをしている時、雨よどろか降ってて、とぶつとぶつとぶつとぶつとぶつと歩いて、その足が止まりへたべたべたとしやがみこんだ。昔中の水がていころろにかかり、その時一番星から光り始めた天から雨が降り出した。 雨はしだいに激しくなりたちまち乾いた地面を染めていく。洪水になって田畑が流されてしまおうではないか心配になってきた四目目の夜に季節外れの稲妻が光り、雨はそれなりにあがった。しかし、ていころろは帰ってこなかった。翌朝、村人が栗谷沢の傍らで、今まで誰もみたこともない岩が雷に打たれたためか、湯気を立ち上らせているのを見た。やすべいは、その年の大晦日のよるに母と妹でいろりを囲んでいると、横前の原っぱの見たこともない岩が呼びかけてくる気がした。その岩は栗谷沢の岩に呼びかけていて、この岩に父の姿がはつきりと見えてきた。」</p>	D649	○雨乞い	

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き
						<p>○とうちやげの池 「むかし神原村唐澤(天龍村神原)の奥の入り谷というところには大池があった。ある年大雨の時、池の堤が崩れて河水が氾濫し、池の水がなくなつたため大蛇は居所を失い、深見の池へ逃げた。大蛇は、時々出でて水の出口を塞いだので、その水の干上がることが度々あったので、その河のあるところをから澤と呼ぶようになった。」</p>	洪水-D532	○大蛇の引越し	
						<p>○天童川の由来 「むかしの諏訪湖は上伊那、下伊那の三郡にわたり周囲六十里もの細長い水海で、竜の海と呼ばれていた。また、この地方出身の竜宮船頭安量磯丸という強くてかっこい神さまが、天皇と同じ資格をそなえていたので天童大神と呼ばれていた。当時の人たちは天童大神の天をとって、諏訪湖のことを天の竜海と呼ぶようになった。その後、天童の竜海により下伊那の南の山々が崩壊を起し、堰き止められていた天の竜海の水は一度に太平洋へと流れ込んだ。この異変により、天の竜海は奥に洲羽湖(すわこ)を残し、あとは細長く深い谷間に変わったという。」</p>	D584	○天童川の由来 ○天変地異による諏訪湖の決壊	

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・遺業	社会の動き
						<p>○あはれ天竜 「大昔、蛇の胸をし、鹿の角を付け、兎の目と牛の耳、龍の足をもったそれはそれは大きな龍が南の海に住んでいた。この龍ははじめはおどろしく仏性におお返していたが、大きくなるに連れ気性が着くなり、力も強くなりそばにいるものに喧嘩ばかり仕掛けていた。仏性は我慢できなくなり、この龍を天の果へ追い払ってしまった。ところが龍は天へ追われてからも暴れ放題で、自分が一番えらいと思ふようになった。誰も恐がって龍によりつく者はいなくなったが、信濃の国の山々は毅然として龍に怯えることなくそびえ立ち、中でも諏訪湖の向こう側にいひえ立つ八ヶ岳はいつも強そうに立っていた。これに腹をたてた龍は喧嘩をしかけ八ヶ岳に体当たりし、山肌を長い胴で幾重にも巻き力いっぱい締めつけた。八ヶ岳もおなかに力を入れてじっと我慢したが、さすがにこらえきれなくなり、地面が割れて嶺の方からどとどとばかり火を吹き、一気に爆発してしまった。龍は、そのものすごい爆風のために天高く打ち上げられてから伊那の山々の間へどとどと落ちた。その後この天の龍はどこへ行ったかは誰も知らないが、落ちたところに大きな跡がつき、その跡が川になってなされたので、この川を天竜川と呼ぶようになったという。」</p>	D642	○ハケ岳の噴火と天竜川の由来	
						<p>○甲賀三郎伝説 「三人兄弟の末子である三郎が、兄たちの計略によって信濃の豊科山の洞穴に閉じ込められ、地底をさまい故郷の近江に戻ったが、いつしか身は蛇体に変わり、人々から恐れ嫌われた。身の危険を感じた時、釈迦堂の老僧の教えによって善蒲ヶ池に身を沈め呪文を唱えると元の体に戻った。妻と再会した三郎は後に信濃の諏訪神社上社の神となり、妻の春日姫は下社の神になったという(ヨリタカ系縁起)」 「三郎は山中で兄にたまたまされて谷底へ突き落とされた。九死に一生を得るが、身は大蛇に変わり、地底の穴を廻って信濃のナギの松原に抜けたという。故里が恋しく十三年にして甲賀に帰るが、蛇体の三郎は皆が恐れた。鞍音堂に入り一心不乱に祈念していると大蛇の形が抜けて元に戻った。やがて三郎は甲賀の長となり家も栄えたが、後に信濃の国へ行ってしまった。人々の夢の中にでてきた三郎は、諏訪明神の化身であったと告げたという。(カネイ系縁起)」</p>	D582	○諏訪明神の由来	

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き
						<p>○於自理皮礼 守矢藏雲乎卷上而 百舌鳥義智奈可婆 鎌遠登真悟斯 (諏訪旧跡志・修補諏訪氏系図)</p> <p>「諏訪地方の人々の間に古くから唱え継がれてきた里謡。諏訪湖から天竜川が流れ落ちていく湖尻の方向が晴れ上がり、しかも天竜川の源流地のひとつに数えられる神体山の守矢の上へ、竜配のように雲が巻き昇って里の方でモズの鳥がギチギチ鳴いたならば、利器である鎌を研いで草刈にいつても雨は降らない、もう大丈夫、という意味。」</p>	D583		
						<p>○人柱</p> <p>「昔、南信濃の天竜川に長い橋が架かっていた。毎年毎年大水で流されてしまうので、村中の人が集まって対策を話し合っていた。ひとりの男が人柱の話をしたところ、その男は最初に言い出したという理由で人柱にされてしまった。男の息子は悲しがり、父は矢作の人柱 キジも鳴かずに撃たれまい、と詠んだ紙を父が埋められている柱に貼り付けた。村の人たちのためにはなつたが、父が余計なことを喋ったためにこんなが、息子の姿をみて村人は、橋を渡る際に息子の歌を思い出し、死んだ男のおかげで安心して渡れることをありがたがったという。」</p>			
						<p>○葛島の水神碑</p> <p>「旧堤の天端に建立された自然石を用いた立派な水神碑。築堤記念か郷名が刻まれている。」</p>	D700		
						<p>○戸隠山</p> <p>「竜が刻まれ、戸隠山と刻られている。中川村田島天の中川橋下流右岸、理兵衛の功德碑「天流功業義公明」とならんでいる。」</p>	D702		
						<p>○中平の水神碑</p> <p>「今でも年々ささやかな祭りが行われ大事にされている水神様。」</p>	D701		
						<p>○福島丸頭葺碑</p> <p>「堤防裏面に設置されている丸頭龍神。」</p>	D703		

西暦	和暦	誘因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き
						○伊那天財天宮 「天童川の船の交通の盛んなりし頃の船着場、川の流れの平穏と舟交通の安全を祈願して祀られたものか。」	D704		
						○高遠弁財天 「河中の天然石の上に祀られている弁天様。過去の幾多の洪水にも流されたことがないという。岩は自然の量水漂の役目もしてきた。」	D705		
						○天龍川改修記念碑 「昭和22年6月天童川が直轄編入され、最初に着手されたところに建てられた記念碑である。」	D708		
						○修堤碑	D709		
						○松尾弁天厳宮神社 「松尾の引き堤とともに現在地に様設された。」	D706		
						○川原弁天 「弁天橋下流左岸側の河原の自然石の上に祀られている弁天。高遠の弁天と同様に出水規模の目安にされてきた。」	D707		
						○復興記念碑	D710		
						○36.6洪水復興記念碑 「新宮川の氾濫により新宮川及び中沢の堤防は破壊し、この修復記念である。」	D711		
						○下河原復興之碑	D712		
						○元大島の記念碑	D713		
						○山吹下平の記念碑	D714		
						○柿開土の記念碑	D715		
						○阿島の復旧記念碑	D717		
						○伴野堤防記念碑 「伴野地区は古くより治水事業の盛んな所で、151K地点に数々の記念碑が建立されている。」	D716		

西暦	和暦	勝因	被害の実態	被害地点 No.	災害の概要	まつわる教訓伝承	伝承 地点 No.	エピソード・意義	社会の動き
						○弁天引堤記念碑 「飯田松川の右岸から弁天橋を経て清水に かける松尾堤防を記念して建立された碑で ある。」	D718		
						○川路村からの移籍記念碑 「『時文』の川路村からの移籍記念碑で、裏 面に川路から時文に移籍した人々の氏名 が記されている。」	D719		
						○三六災復旧記念碑	D720		
						○川路郷家屋移転記念碑 「36.6災により川路地区の低平地の家屋は 壊滅的な打撃を受け、災害後この地区の 人々は移転した。」	D721		
						○復興記念碑 「36災書から4年後に大鹿村では災害復興 記念事業として、役場の庭に「復興記念碑」 を、大西山崩落地籍に「殉難の碑」を建立 し、復興記念式典を行った。」 「昭和36年梅雨前線集中豪雨により前古 未曽有の大災害を受け55名の尊き人命と 40数億円の被害を蒙り之が復旧について 国県の援助と村民の一致協力により復興 した。この時の建設大臣中村梅吉氏の揮毫 により之を建つ、昭和40年10月建之、大鹿 村。」	D723		
						○殉難の碑 「昭和36年梅雨前線集中豪雨災害により 尊き犠牲となられた霊を祀る。昭和40年10 月建之 大鹿村。」 ○大西公園の大西観音 「大西山崩落地の麓にある大西公園には、 災害で犠牲になった人を弔うための大西観 音がある。」	D724		
						○斜面を転がってきた巨石 「36災害の時にマサが洗われて花崗岩の 巨石が斜面を転がってきた。」	D725		
						○三六災害最高水位標 「天竜川総合学習館 かわらんべの前の河 原にある。」	D722		